

明日をひらく地域活性化のための情報誌

地域づくり

2013

9

ISSN 1340-8917



特集 ■ ギネス世界記録に挑戦

本誌は、宝くじの社会貢献広報事業として助成を受け作成されたものです



1 巻頭エッセー／「食」と「癒やし」のにいがた暮らし

泉田裕彦(新潟県知事)

特集

ギネス世界記録に挑戦

4 基調論文 ギネスによる地域の活性化

高橋一夫(近畿大学経営学部教授)

8 北海道 食パンで作るモザイク・トーストアート

天方慎治

10 青森県弘前市 横笛の合同演奏でギネス記録達成

佐藤ぶん太

12 群馬県館林市 「世界一のこいのぼりの里」で観光誘客を

岡戸千絵

14 山梨県 勇壮な武者行列がギネス世界記録に

窪田克一

16 新潟県 市民と共に886人の「世界一長い乾杯リレー」

五十嵐利行

18 静岡県浜松市 鍵盤ハーモニカ、小学生688人で同時演奏

波多野千津子

20 石川県輪島市 闇に浮かぶ幻想的な棚田の風景

古戸直美

22 大阪市 「けん玉」で魅力あるまちづくり

馬場正敏

24 奈良県高取町 ビールの空き缶で世界最大のオブジェ製作

野村幸治

26 広島市 ギネスに挑み、平和の願いを世界に発信

平尾圭司

28 山口県宇部市 イルミネーションの聖地・宇部を目指して

崎山智司

30 香川県高松市 ボトルキャップでギネスに挑戦

久本義展

32 福岡県 心を一つに「1039人で1040脚」

里川径一

34 大分県中津市 からあげ供給量1トンでギネス記録達成

友松達哉

レギュラーレポート

トピックス

36 世界記憶遺産に「御堂関白記」など2件 文部科学省国際統括官付

38 地域再生実践塾 北海道小樽市
地域で育てる観光まちづくり人材

大津 晶

40 移住・交流推進支援事業 長野県阿智村
都会の女性招き、婚活イベントを開催

大石真紀子

42 地域づくり団体探訪 新潟県柏崎市
柏崎ライフセービングクラブ
海水浴客の安全確保に貢献

44 北から南から 長野県須坂市
「クレームに学ぶ クレームゼロ運動」を推進

寺沢隆宏

45 首長の思い
市民とともに歩むまちづくり

西嶋泰義(大分県佐伯市長)

48 センター通信

グラビア

2 ギネス世界記録に挑戦

46 都道府県漫遊 【島根県】

47 手前みそですが… 【栃木県那須塩原市】



戸隠そば(「ばっち盛り」と呼ばれる独特の盛り付けが特徴)

問い合わせ：戸隠観光協会
0266(2554)20000
(写真提供：戸隠観光協会)

毎年11月1日には「新そば献納祭」が行われ、戸隠の大神様に、その年の新そばを献納する。献納前には手際よく「そば切」に仕上げる職人のあざやかな技も見ることが出来る。

これを機に戸隠地区では一斉に新そばが出回る。そして新そばの美味しいシーズンが始まる。

戸隠そばは、日本三大そばの一つとされ、大勢の観光客に喜ばれている。その店の数は、そば屋だけで約30店舗、宿坊等で昼食も提供しているところを入れると、それ以上の店が狭い地域に軒を連ねている。

表紙
戸隠そば

(長野市戸隠)

「食」と「癒やし」の にいがた暮らし

新潟県知事 ● 泉田裕彦



皆さんは、新潟というところ、どのようなイメージをお持ちでしょうか。やはり多くの方が、「米」、「酒」、「雪」といったものをイメージされるのではないかと思います。「米」や「酒」をはじめ、新潟は海産物や農産物、果物など素晴らしい食べ物が多く、まさに「食の宝庫」です。

新潟に来てくださるほとんどの皆さんがおっしゃるのは「新潟は食べ物おいしいですね。」ということですが、平成21年に新潟県で国体が開催された際に、全国から来県された方々に新潟の「食」に関する評価をしていただいたところ、「期待以上においしかった。」という声を非常に多くの方からいただきました。冬に降り積もる「雪」が、豊富な水となり、大地の栄養とともに食材をおいしくし、「これはやっぱり違うよね。」と感じていただけたのだと思っています。

「食の宝庫」だけに、お勧めの「食」は数え挙げたら切りがありません。日本一の「コシヒカリ」をはじめ、大粒で甘いイチゴ「越後姫」、香りがよく豊かな旨味の「新潟茶豆」、甘くてとろけるような食感の「南蛮エビ」、程よく脂ののった「佐渡寒ブリ」、その他「ヤナギガレイ」、「にいがた和牛」、「にいがた地鶏」など、四季を通じて旬の食材を楽しんでいただけます。

その中でも、特に今回紹介したいのが、知る人ぞ知る「ルレクチエ」という洋なしです。明治時代に、日本で初めて新潟県で栽培が始まりましたが、栽培技術が難しかったため、生産量が少なく、「幻の洋なし」とも言われています。「ルレクチエ」の旬の時期は、11月下旬から12月頃です。とろけるような食感と繊細ながら濃厚な甘さを持ち、本当にほったが落ちるほどおいしいので、ぜひお試しください。と思います。

「食」のほかにも新潟には、「癒やし」の温泉があります。新潟県は、温泉地の数が153カ所と全国で3番目に多く、多種多様な効能の温泉があります。何と言っ

ても、露天風呂から眺める日本海に沈む夕日は、最高のロケーションです。日頃の疲れを癒やし、リフレッシュしたいのが、小雪舞うなかでの露天風呂です。特にスキーなどウィンタースポーツで体を動かした後に入っていたくど、本当に疲れが癒され、人生至福の時と感じることができそうですので、ぜひ利用していただければと思います。

県では、このような新潟の魅力をより多くの方に知っていただくため、東京の表参道には「表参道・新潟館ネスパス」というアンテナショップを設置しています。新潟の「食」を中心とする物産の販売に加え、観光、Uターン就職情報など、新潟に関する様々な情報を、それぞれの専門の職員がわかりやすく提供しています。

現在、県では定住人口の増加にも力を入れており、ネスパス内の「にいがた暮らし相談窓口」では、相談員が新潟の住まい、暮らしに関する相談に対応しているほか、県内市町村の定住支援策、田舎体験ツアーなどの情報を紹介しています。さらに、「にいがた暮らしセミナー」も定期的に開催しており、先輩移住者の生の声を聞いていただくことができますので、お気軽にお越しください。若い方、子育て世代の方、そしてセカンドライフを楽しみたい世代の方、それぞれの生活スタイルに合った「にいがた暮らし」を提案させていただきます。

新潟県は、日本海側の中央に位置し、陸路・航路・空路が全国に伸びていますので、首都圏や各都市とのアクセスが良好です。さらに、平成27年の春には北陸新幹線も開通し、関西圏からの交通の利便性がより高まります。

「食」と「癒やし」のある新潟で、充実した人生を送ってみるといえるのはいかがでしょうか。皆さんのお越しをお待ちしております。

ギネス世界記録に挑戦



ギネス記録達成後の記念写真。3742人が笛を合同演奏した

● 青森県弘前市 (p10-11)



完成したモザイク・トーストアート。帯広開拓の祖・依田勉三氏がモチーフとなっている

● 北海道 (p8-9)



認定員（右）からギネス世界記録登録証を授与される信玄公役の俳優・沢村一樹さん

● 山梨県 (p14-15)



満開の桜とこいのぼりの競演。館林市内では毎年、数千匹のこいのぼりが掲揚され、市民や観光客の目を楽しませている

● 群馬県館林市 (p12-13)



懸命に鍵盤ハーモニカの演奏を続ける小学生。700人を超える「キラキラ星」の同時演奏は大迫力だった

● 静岡県浜松市 (p18-19)



「世界一長い乾杯リレー」。世界記録達成を祝して参加者全員で乾杯！

● 新潟県 (p16-17)



ギネス世界記録の認定書を手にする西原昇・此花区長
(中央)。市民242人がけん玉のとめけんに成功した
● 大阪市 (p22-23)



闇に浮かぶ棚田のイルミネーション。LED電球2万
個余りの明かりが幻想的な雰囲気を出している
● 石川県輪島市 (p20-21)



ひろしまフラワーフェスティバルでフラワークイーン
ら600人が手をつなぎ、ギネス記録を達成した
● 広島市 (p26-27)



最大のアルミ缶オブジェ。3万5679個のビー
ル缶で作られた高取城天守閣
● 奈良県高取町 (p24-25)



ボトルキャップの回収を呼び掛ける「高松四十七年会」
のメンバーら。1年に272万個集め、世界記録になった
● 香川県高松市 (p30-31)



初代ボトル彫刻(ピラミッド、高さ7.4m)前での点灯式。イ
ルミネーションコンテストは今や冬の風物詩になっている
● 山口県宇部市 (p28-29)



1日の供給量でギネス記録を樹立した「からあ
げ1トン」
● 大分県中津市 (p34-35)



多人多脚(1039人1040脚)のギネス記録挑
戦を前に士気を高める参加者
● 福岡県 (p32-33)

ギネスによる地域の活性化 —観光資源としての価値を考える—

1. はじめに

各地の自治体や商店街、青年会議所などが、地域の活性化を目的としてギネスの世界記録の認定を目指すイベントを全国各地で開催する機会が増えてきている。ギネス世界記録という話題性からマスコミにも取り上げられて知名度が高まる、皆が同じ目標に挑戦することで一体感を持つことができるなどの効用が認識されるに従い、その数が増している。2013年3月からは『ギネス世界記録 町おこしニッポン』というサービスが「ギネス世界記録」の日本での認定組織であるギネスワールドレコーズリミテッド日本支社によって行われている。

本稿では、地域活性化にギネス世界記録を活用する効用を整理するとともに、観光資源としての可能性について言及する。

2. ギネスについて

我々が「ギネスに挑戦」などとしている「ギネス」とは、正確には「ギネス世界記録」と呼ばれている。年に一度ギネス世界記録を本として出版しており、2000年版までは「The Guinness Book of Records」として刊行されていた。日本では長く「ギネスブック」の名称で親しまれていたが、出版元の移り変わりにより2002年度版は「ギネスワールドレコーズ」、2004年度版以降は「ギネス世界記録」に改称されている。毎年9月に発行され、様々な分野の世界一が何かを認定し掲載している。こうした記録認定を行っているのがギネスワールドレコーズリミテッド（以下、ギネス社という）である。

ギネス社のホームページには「ギネスワールドレコーズジャパン『世界一』を通じた町おこし（地



近畿大学経営学部教授 ● 高橋 一夫

域おこし」を応援してゆきます！（原文のまま）」（ギネス世界記録 町おこしニッポン）あるいは「ギネスワールドレコーズリミテッドは、販売の拡大、新規顧客の獲得、カスタマーリレーションズの強化など、企業様の個々の目的に適した、あらゆる形の『ギネス世界記録に挑戦』をご提供いたします（原文のまま）」（ギネス世界記録ビジネスソリューション）と世界一を奨励しており、様々な活用の仕方があることを訴えている。ギネス世界記録は、世界一の認定となる様々な事象を本として取りまとめ、出版することで収益を上げるモデルであるから、自治体や企業が世界一を作り上げ、活用することはお互いWin-Winとなっていることが分かる。

ホームページで紹介されている事例として、「モザイク画のギネス世界記録で町おこし」があり、「地域の特産品を用いて挑戦することもできる」で、地域活性化などに、もって来い。この挑戦に



写真1. 世界最大の野菜モザイク画

地元の人たちが参加することで地元愛や絆が強まったり、テーマを据えて、何かのモザイクを描くなど、柔軟性がある、幅広い表現ができるのも特徴です」と紹介されている。おにぎり、せんべい、餃子、野菜などの地域の特産品を活用して世界記録を作ることを奨励している。

一方で、地域の自治体や商店街などがギネス世界記録にチャレンジするメリットは、以下の3点が考えられる。

(1) 地域の一体感の醸成

世界一という目標を共有し、課題にチャレンジするというプロセスも共有することで地域の一体感ができあがる。チームワークビルディングは、地域の他の課題への対応にも有効な効果をもたらす可能性がある。

(2) 知名度の向上

世界一へのチャレンジというイベントは、新聞・テレビなどのマスメディアにも取り上げられることが多く、知名度アップが期待できる。

(3) 集客力の向上

世界で最も長い串焼きを作る、太鼓の合同演奏を世界最大の人数で行うなど、様々な分野で世界一を目指し、仲間との協働と競争を楽しみながら、自分の限界にチャレンジするというイベントは話題性もあり集客力が高い。過去12カ月の実績によると、世界各地で行われたギネス世界記録イベントは、総計で約200万人の動員数を誇るという(出所:ギネス世界記録HP)。

出版元のギネス社が世界記録を奨励し、さらにそのサポートの体制をつくる。地域は世界記録をつくる様々な活動をする中で、地域活性化の手段としての活用が増えていることがわかる。

3. 観光資源と観光行動

(1) 観光資源と観光対象

国連教育科学文化機関(ユネスコ)は今年(2013年)6月26日、プノンペ

ンで開催した世界遺産委員会で、日本政府が推薦した「富士山」(山梨、静岡両県)を世界文化遺産に登録した。1993年に、法隆寺地域の仏教建造物(奈良県)、姫路城(兵庫県)が国内で最初の世界文化遺産に、同じ年に屋久島(鹿児島県)、白神山地(青森・秋田両県)が世界自然遺産に認定されて以降、日本には17件の世界遺産が登録されている。

また、同じユネスコには人びとの慣習・描写・表現・知識及び技術並びにそれらに関連する器具・物品、加工品及び文化的空間を「無形文化遺産」として登録をしており、京都の祇園祭など21件が登録されている。人間の営みや自然の力によって形づくられてきた観光資源は、観光者(注1)が魅力を感じて観光行動を起こす目的となるモノやコトであるといえよう。

しかし、観光資源はそのままの状態では利用できないものが多い。富士山も麓から5合目までの開発が進み、スカイラインの整備がされたことにより、多くの人が登山できるようになった。また、美しく見える場所が確保されていることにより富士山は観光の対象となっている。観光資源は人の知恵や手が加わり、資金をかけてこそ観光対象(注2)となる。

図1は観光事業の構造を示している。観光者は、観光資源、例えば美しい富士山を見る、という行動を起こし満足感を得たり、あるいは、富士山の見える宿に泊ってサービスを受けたり、富士山の登山道清掃活動で地域住民との交流を楽しむ。地域の観光事業は、観光資源を中心にそれぞれの相互作用がみとれる。

出所: ギネス世界記録ホームページ
(<http://www.guinnessworldrecords.jp/news/2013/7/mosaicrecordinjapan-49814/2013年7月15日取得>)

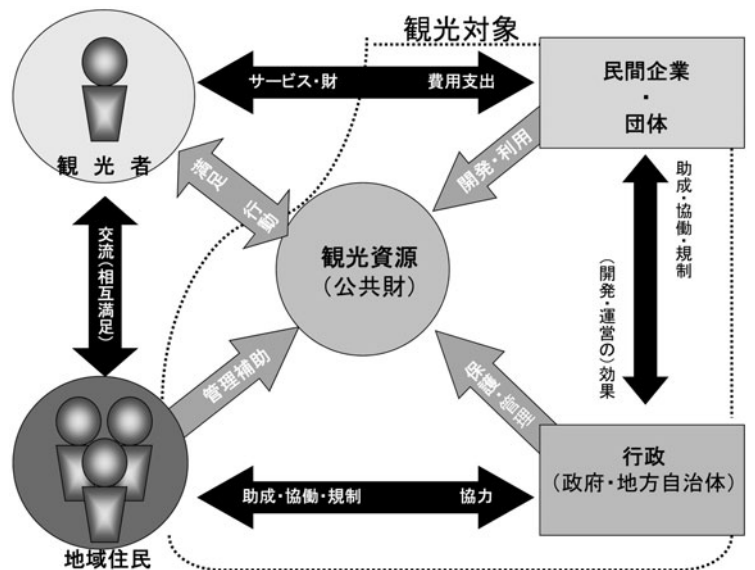


図1. 観光事業の構造

出所：捧富雄『観光と観光事業』（羽田耕治 2008）の図に加筆・修正



図2. プッシュ・モチベーションを起点とした観光対象の選択

出所：筆者作成

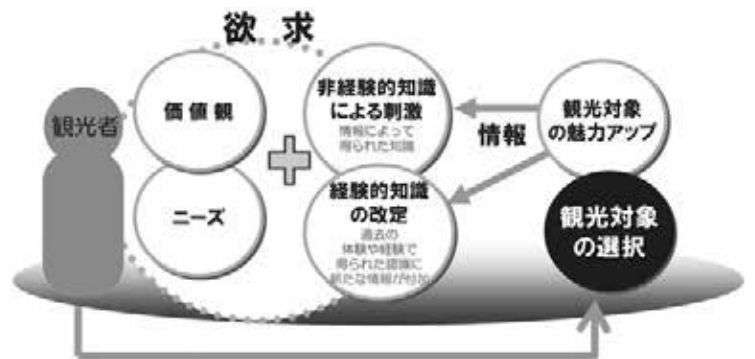


図3. プル・モチベーションを起点にした観光対象の選択

出所：筆者作成

（2）観光者の動機と欲求

図2は、観光者が観光対象の選択、すなわちこの観光地を選ぶかという動機と欲求の構造を示している。観光行動は観光者が観光資源を中心とした観光対象を利用する活動である。観光者は自らの個人的な価値観とその時のニーズにより「どこに行くのか」「何をするのか」という旅行先の決定をする（プッシュ・モチベーション―旅行に行きたいという行動を人に起こさせる個人的要因）。例えば、夏休みに家族との共通の時間を持ちたい、というニーズがある時、アクティブに過ごしたいという価値観を持っているのか、静かに過ごしたいという価値観を持っているのかで行き

先は変わってくる。そして、行き先をどこにするかという欲求（ウォンツ）の段階では、今までに行ったことがある観光地の中から選択をするのか（経験的知識）、テレビなどで紹介をされた観光地を選択するのか（非経験的知識）で観光対象が選択される（プル・モチベーション―観光地の各種の資源で人のある特定の場所に向かわせる要因）。旅行の行き先の選択の背景には、上記のプッシュ・モチベーションとプル・モチベーションの2要因が存在している。図2のようにプッシュ・モチベーションによって「旅行」をすることが決まり、プル・モチベーションによって「どこ」に行くかを決定するときもあれば、反対にプル・モ

ス世界記録へのチャレンジによって、地域の自治体あるいは商店街などがめざすことは、「地域の一体感の醸成」や「地域への愛着心の涵養」ばかりではなく、ギネス世界記録のもつ「集客機能」への期待である。こうした環境の変化と地域のニーズを考えた時、ギネス世界記録を図1に当てはめると観光資源そのものだといえる。地域に新たな集客力をもたらすのは地域の埋もれた資源を発掘することばかりではなく、創造されたイベントも価値ある資源だということである。前述したモザイク画は、テーマに沿っておにぎり、せんべい、餃子、野菜などの地域の特産品を活用して描かれていく。地

チベーションによって「特定の場所」への魅力が高まり、プッシュ・モチベーションが刺激されて「旅行」に行くことが決まることもある（図3参照）（橋本2013）。
（3）観光資源としてのギネスの価値
近年、観光者の価値観が多様化し、求めるニーズも変化してきていることから観光資源も多様化している。一方、ギネ



図4. ギネス世界記録を通じた地域と観光者の関係

出所：筆者作成

また、ギネス世界記録を観光対象とする場合は、「観光」の意味を「見る、学ぶ」という狭い範囲で解釈するのではなく、「する、楽しむ、休む」も付け加えた幅広い解釈をする必要がある。「見る、学ぶ」という観光であれば、例えば歴史・文化に関わる神社・仏閣や庭園などは、観光者自身に一定の知識があることによってその感動に大きな違いが出る。特に石碑しか残っていない史跡などは、観光者の知識の有無が、その価値の高さを決めるといってよい(注3)。しかし、ギネス世界記録を作ろうとするイベントは、参

加し楽しむというレクリエーションの要素が強く、子供でも楽しめるため、観光対象の価値が家族での参加へと拡がりをつくる。さらに、「世界一」という共通目標を持ちながら参加することで、地域住民との交流も楽しめ、参加者は住民との相互満足を共有できる。

4. おわりに —観光デザインとしての活かし方—

観光のスタイルが「個人旅行化」したり、「テーマ性の強い時間消費型」に変わってきたりと消費者ニーズが観光地に変化や創造を求めている。「もととある事柄に対して問題意識をもち、その課題に対して新しい方向性や解決策をもってその事柄に対峙する時にデザインが生まれてくる」(加瀬浩嗣1996年)という。

地域の資源だけではなかなか集客力がないという問題意識をもったことをきっかけに、ギネス世界記録を活用したイベントを企画し新たな観光対象にしようとする動きは、今後も地域の活性化策の一つとして活用されるだろう。地域資源を活用したギネス世界記録のイベントを創造することは、「地域での新しい時間の過ごし方」を観光者に提案していくことに他ならない。こうした「観光の新しい展開として『どのような時間を過ごすか』を提示すること、またそれを観光目的とし『観光のシナリオ』をつくることは、デザインそのもの」(伊坂正人2000年)であるといえよう。すなわち、ギネス世界記録をきっかけとして新しい旅行の魅力を創り出し、地域が保有する様々な観光資源を顕在化させることが求められているのだ。

(注1) 観光行動をする人という意味があり、その人が観光地を訪れた場合に観光客と呼んで区別する。

(注2) 観光者が、対象の資源に魅力を感じ、観光行動の目的となるモノ(あるいはコト)をいう。

(注3) 例えば、京都の河原町通りの店舗前に「坂本龍馬、中岡慎太郎遭難之地」という石碑があるが、予備知識があつてこそ近江屋での一連の事件が思い起こされ価値が伝わる。

(参考文献)

高橋一夫編著『1からの観光』碩学舎 2010年

羽田耕治編著『地域振興と観光ビジネス』JT B能力開発 2008年

小口孝司・花井友美「観光者の欲求・動機とパーソナリティ」橋本俊哉編著『観光行動論(観光学全集第4巻)』原書房 2013年

加瀬浩嗣「観光デザイン」長谷政弘編著『観光マーケティング—理論と実際—』同文館 1996年

伊坂正人『観光に対するデザインアプローチ』静岡文化芸術大学研究紀要 2000年91—97頁 (Web)

ギネス世界記録 日本公式サイト
<http://www.guinnessworldrecords.jp/> 2013年7月15日取得

ギネス・ワールド・レコーズ地域活性化委員会
<http://japangenki.com/> 2013年7月15日取得

食。パンで作るモザイク・トーストアート —1万6500枚、十勝産小麦の価値を世界へ—



(株)満寿屋商店 地産地消部 部長
世界トーストアートin十勝 代表

・天方慎治

◆◆◆
国産小麦の一大産地と
地域密着ベーカリー

北海道・十勝地方は、国内産小麦の一大生産地である。昨年から本格的に作付が始まったパン用品種『ゆめちから』は、いままで難しかった国産小麦のパンづくりを可能にした十勝で生まれた期待のパン用小麦である。

この小麦が栽培されたことで、国内産小麦最大収量である『きたほなみ』とのブレンドによって、これまでの数倍のパン用小麦粉が今後、市場に出る。しかし、国内のパン事情は、現在も約95%以上の製品が北米を中心とした海外からの小麦で作られたものが一般的で、国産小麦でのパンづくりは加工適性・材料価格の問題と小麦粉自体の認知不足で需要と供給のバランスが安定していないのが現状だ。

私が働いている(株)満寿屋商店(ベーカリー・十勝管内6店舗)は「十勝をパン王国にする」を合言葉に、昨年10月(全店全商品・パン生地に限り)

◆◆◆
十勝産小麦100%に切り替えた地域密着のベーカリーである。

◆◆◆
きっかけはデザイナーの一言

今回のトーストアートイベントは、帯広市のデザイナー真浦綾子さんから、「パンを使ったモザイク・トーストアート」をやりたいと言われたことがきっかけとなった。すぐに、小麦生産者の前田茂雄さんに連絡を取り、このイベントの趣旨を説明して企画から参加してもらうことになった。

国産小麦の認知度と利用の現状は先にも述べたとおりで、需要と供給のミスマッチは理解していただけに、何か地元の小麦を発信して利用拡大へ繋げたい、もっと多くの人に現状を知ってほしいと考えていたので、それならば、世界一のものを十勝産小麦のパンで完成させれば、多くの人に知ってもらえるとの3人の共通した思いからこのイベントを開催することが決まった。

◆◆◆
賞味期限切れの小麦粉を再利用

私がこのイベントをやろうと決めた時点で一つの小麦粉が頭に浮かんでいた。それは、研究機関の小麦だ。育種をしたり、製品として問題ないかを試験したりする公的な機関が十勝にある。

そこでは、毎年研究用に試験製粉された小麦粉が若干保管されている。この中には研究機関でもテストをしきれなく品質保持期限が切れてしまった小麦粉が廃棄を待って保管されている。このことを以前から耳にしていたため食用では使えないが飼料として再利用すれば今回のイベントに使用する原料として使えるのではないかと考えたのだ。

◆◆◆
動き出した世界一への挑戦

前田さんの提案で、このイベントは学生を中心に進めていこうと話がまとまった。帯広市にある帯広畜産大学の農業サークル「あぐりとかち」に協力してもらい、今年4月初旬にプレイイベントとして、畜産大学の構内に新入生の歓迎モニュメントとして1000枚のトーストアートを完成させることができた。

同大学でのプレイイベントを知って、本番への実行委員メンバーは総勢60名にもなった。また、このイベントに40社以上の協力を取り付けることが出来た。

5月からは、デザイナーが制作した設計図を基に図面の作成作業が数回に分けて行われ、6月か



モザイク・トーストアートに取り組む参加者ら



上から半分程度出来上がったモザイク・トーストアート



会場の様子

このイベントを通して、十勝産の小麦粉を使用して素晴らしい膨らみのパンが作れることが証明できたし、十勝産小麦が美味しいというメッセージも発信できた。しかし、まだまだ国産小麦のパンへの使用量は限定的だと思っている。少しでも多くの方がこのメッセージを受け取って国産小麦を使用してくれるようになればと願っている。今後、地域が参加できるイベントを継続して行っていきたいと考えている。

ギネス記録に挑戦

らは、地元のベーカリー5社が協力して、およそ950本（3斤で1本）の食パンを用意した。焼いた食パンは厚さ1・8センチ（6枚切）にスライスされ、トーストした後に、冷凍庫に保管され、本番前の焼き目付け作業へと進んだ。

バーナーによる焼き目付け作業（食パン1万6500枚を黒から白まで濃淡4種類に焼く作業）には、地元の専門学校の生徒20名が授業の一環として参加してくれ、万全の態勢で本番に臨むことが出来た。

食パンの行き先と今後

「使用した食パンは、どうなるの？」。

今回のイベントで最も実行委員が気にかけていたことだが、実行委員のメンバーで、本別町で畜

て1万6500枚の食パンを使った世界一のトーストモザイクアートが完成した。

このジャンルはモザイクアート全体の面積で勝負が決まるが、今回の作品は縦15メートル、横11メートルで面積は165平方メートル。これまでの記録150平方メートルを15平方メートル上回った計算だ。

モザイクアートの絵柄のモチーフになったのは、帯広開拓の祖と言われている依田勉三氏である。今日の十勝で農業や地域が営んでいることへの感謝を込め、依田氏が食パンを持ったデザインにした。

産業をしている本寺さんの所へ運び、パン粉に加工してから冷凍して、少しずつ豚の飼料に混ぜている。

「真っ黒のパンも使えるの？」という質問にも、家畜のエサにはわざと炭を与えることもあるため、全く心配はない（勿論、専門家の飼料配合による）。しかも、この豚の肉を使用したハンバーガーを地元のお祭りに提供した。

本来であれば、廃棄されてしまう小麦粉を使用し、地域が一体になって活動できるイベントを行い、その材料を家畜のエサとして再利用し、最終的に人間の食糧へ循環させる。この地域であったからこそ出来る循環型の素晴らしいイベントを開催できた。

ギネス社への記録申請は、必要資料をそろえて提出し、1、2カ月後に結果がでる予定になっている。

横笛の合同演奏でギネス記録達成

―津軽を世界一祭り囃子が似合う街に―

津軽笛地域づくり実行委員会 代表 ● 佐藤ぶん太

津軽の音、祭り囃子

「津軽の音」と言えば全国的にすぐ浮かぶのは「津軽三味線」だと思いますが、一般的な認識と地元での認識の違いはよくあることで、地元津軽人が故郷を想う魂の音と言え、ねぶた・ねぶた祭りや、お山参詣といった地元の祭り囃子が真っ先に浮かびます。県外に出た津軽人が望郷の念を抱くのは、間違いなく生まれ育った地元の、笛や太鼓などで演奏する祭り囃子です。

コミュニティ形成のツール

青森県弘前市は全国的にも有名なねぶた・ねぶた祭りの発祥地で、郷土芸能が盛んな地域です。弘前市内だけで80を超えるねぶた団体があり、実に弘前市民の約15人に1人が弘前ねぶた祭りに参加しているという統計も報告されています（注1）。また津軽で祭りをやっている人は年齢に関

係なく地域活動にも積極的で、お祭りの協賛金が目標を超えると慈善団体へ寄付する団体や、「子ども達に夏休みの思い出を！」ということなどでジマスのつかみ取り大会を主催している団体もあります。観光という側面も当然ありますが、祭りとは地域コミュニティを形成する大切なツールなのです。

また、祭りが近づくところに行っても町内会の人や囃子の練習会を開き、子ども達が集まり練習して本番に備えます。ですから横笛を吹くことができる子が高学年のクラスに5、6人はいるのが弘前界隈の市町村では一般的な話で、ほとんどのご家庭に1本は横笛があるという地域です。しかも津軽笛の演奏法は独特な上に表現レベルが高いのだそうで、しばしば県外からも習いに来る人がいます。

こんな環境で生活しているので地元では「当たり前」だと思っていました。が、地域コミュニティ形成のツールとしても、横笛を吹くことができる人の数も演奏法も全国的に「誇れるもの」だと気が

がつき、地元の人をもっとそれを認識した上で後世へ伝承していくべきだと思ふようになりました。

横笛でギネス挑戦へ

2008年、地域の誇りを馴染み深い横笛から発信しようと「横笛普及プロジェクト」を立ち上げ、演奏会や積極的な後継者育成事業を行ったことにより、少しずつ「当たり前」から「誇れるもの」へ変化が見られるようになりました。

そんな中思いついたのが横笛合同演奏者数のギネス挑戦でした。折しも、2011年に弘前城が築城400年を迎え、全市を挙げて「弘前城築城400年祭」を執り行うことになっていました。節目の年にギネスに挑戦することを通して、地元の誇りを今まで以上に地元の人が認識することが出来ると思

い挑戦しよう

と決めま

した。

あくまで

地元の人へ

向けてであ

り、ギネス

記録で即観

光に繋げよ

うという意

識はありま

せんでし

た。



津軽横笛の合同演奏でギネス世界記録に挑戦する様子

官民学一体で世界記録達成

2010年、名称を「津軽横笛ギネス実行委員会」と改め、「世界一祭り囃子が似合う街・津軽」をキャッチフレーズに、ギネス記録達成に特化した活動を始めました。

地域を盛り上げたいという思いは垣根を越え官民学一体となりました。まず弘前市は、ねぶた囃子でギネスに挑戦することを弘前城築城400年記念事業の中核



記録に挑戦する参加者ら



津軽横笛の練習をする子供たち

念事業の中核

事業のひとつとして位置付け、金銭面だけではなく、広報や準備段階でのアドバ

イス、ボランティアの手配など多くの協力をしてくだ

さいました。

また、この事業を通してもっと多くの方が津軽の笛に親しんでもらうきっかけにしたいと思い、弘前管工事業協同組合

のご協力をいただきながら5200本の塩ビ管の横笛を製作、希望者に無料配布する練習用の笛を作りました。

その甲斐あってか、弘前市にある小中高、大学、専門学校がギネス挑戦へ向けて積極的にねぶた囃子(笛)の講習会を開催、実行委員会が指導に行った人数はなんと4000人を超えました。またインターネットを利用してねぶた囃子を練習できる環境を作るため「ねぶた囃子レッスン動画」をU動画投稿サイトへ投稿し、練習方法の拡大を図りました(注2)。

2011年7月31日、約2年の準備期間を経ていよいよ記録へ挑戦する日が来しました。津軽全域、そして県外からの参加者が続々と会場に集結し、それまでの記録を1500人近く上回る3742名の「笛合同演奏者数ギネス世界記録」を見事に達成しました。

官民学が連携したことで様々なジャンルの方が興味を持ち、どこへ行ってもギネス挑戦の話題が出る状況を作ることができたからこそ、結果として地域が一つになり達成出来た記録だと思っています。ギネスに挑戦することで、①地元での津軽笛に対する認識が「当たり前」から「誇るべきもの」へ変わった②世界に向けて津軽笛をPRできた③祭りに参加する人が増えた―など多くの効果がありました(注3)。

記録達成は出発点、津軽笛を「全国区」に

我々の目標はあくまで地元の人が地域の魅力に気がつき、それをエネルギーにして津軽笛の文化

を伝承、発信し、発展させていくことであり、ギネス記録達成が着地点ではありません。しかしながらギネス記録を達成したからこそ、本当の地域づくりへのスタートラインに立てたとも思っています。

我々が挑戦した記録は津軽の笛、囃子の魅力を再確認するのには大変有効でした。これからは①全国的に見てもレベルが高いと言われる津軽で笛を吹く人の演奏力を知ってもらうこと②伝承には欠かせない「指導力のある奏者」の育成③初心者でも楽しめる環境の提供―を積極的に進める必要があると思っています。

今年9月29日、弘前市が誇る庭園「藤田記念庭園」で、津軽と下北地方に伝わる郷土芸能の現地を代表する囃子方が集結し、ワークショップとコンサートを行う「津軽笛博覧会」を開催します。

この事業は前述の3つを満たすだけではなく、津軽笛が津軽三味線のように「全国区」になっていく沢山の仕掛けを工夫しています。今のところ津軽笛で観光客を呼べるまでには至っていませんが、「ギネス挑戦」をきっかけに、地元の人が「気づいた」ことで、津軽笛の情報発信がこれまで以上に大きなエネルギーで進んでいくものと確信しています。

(注1) 弘前大学特別研究員 三浦俊一「弘前ねぶた祭り参加団体調査」より

(注2) ねぶた囃子レッスン動画

<http://tsugaru-hayashi.jp/lesson/>

(注3) ねぶた囃子でギネス挑戦ダイジェスト版

<http://www.youtube.com/watch?v=F6Y3xt4BcOE&feature=youtu.be>

「世界一のこいのぼりの里」で観光誘客を ― 花のまち館林、数千匹が桜と競演 ―



館林市経済部花のまち観光課観光政策係長
(館林市観光協会事務局次長)

● 岡戸千絵

館林市の概況

館林市は、「鶴舞う形」といわれる群馬県の東南部、ちょうど鶴の頭の部分にあたり、関東地方のほぼ中央に位置しています。市の北には渡良瀬川、隣接する邑楽郡明和町を隔てた南には利根川と大きな河川が流れ、城沼、多々良沼、近藤沼や茂林寺沼など多くの池沼が点在するなど、豊かな水資源と自然環境に恵まれています。

世界一と称されるつつじが岡公園のツツジをはじめ、季節ごとに咲く、桜、花菖蒲、花ハスなどの色鮮やかな花々と、童話「分福茶釜」のまちとして観光客の皆様をお迎えしています。また、最近では昨年5月に開業した高さ634メートルの東京スカイツリーから63・4メートルのまちとしても知られています。

独自の桜まつりに

日本全国の桜の名所では、桜前線の北上とともに訪れた春を祝うかのように、こぞって「桜まつり」を開催していると思います。御多分に洩れず、本市においても数カ所の桜の名所が存在するので、世界一のツツジよりも約1カ月早く咲くこの桜を活用し、「花のまち館林」の春を告げるイベントとして、約20年前から「館林桜まつり」を実施しています。

中でも一番の名所は、東武鉄道の館林駅を下車して1キロほど、市役所南側の鶴生田川（つるうだがわ）沿いに植えられている約415本の桜並木です。「この桜まつりを他の観光地には無いものとして差別化したい」。そんな思いを市が持っていたところ、鶴生田川上流において河川の浄化活動に取り組んでいた成島町地区のボランティア団体「成島河川愛護会」が、河川浄化に関心を持ってもらおうとシンボルとして数匹のこいのぼりを揚げ始めていました。これが桜とこいのぼりのコラボレーションのきっかけです。

こいのぼり掲揚事業のねらい

こいのぼりは元来、端午の節句に飾られるもの。これをふまえ、3月下旬からの桜との競演、本市一番の観光シーズンである4月中旬からのつつじまつりを経て、端午の節句の5月上旬までを掲揚期間とし、幅広い年齢層に楽しんでもいただく「こいのぼりの里まつり」事業を開始しました。平成14年、1回目のこいのぼりの里まつりを実施した際は、掲揚数が4カ所合計で1400匹。地域の



ボランティアと市職員による掲揚作業の様子



ギネス世界記録認定証



平成25年館林さくらとこいのぼりの里まつりポスター

ツリーから63・4^{キロボイ}のまちであることから「634」の数字にこだわり、6340匹の掲揚数でした。これだけの数の掲揚ができるのは実行委員会、そしてボランティアの方々のご尽力があつてこそのことです。こいのぼりを寄付していただいた方々にも感謝しなければなりません。

今後このまつりをさらに磨きあげ、全国の皆様に発信し、観光誘客を図っていきたいと思います。

ギネス世界記録への挑戦

河川や池沼の愛護・水質浄化等環境への啓発活動を実施する団体と市及び市観光協会で「こいのぼりの里館林実行委員会」を設立し、まつりの活動母体も誕生しました。

これにより、従来、本市を訪れる観光客はツツジの見頃となる4月下旬からでしたが、3月下旬の桜の季節から誘客を図ることができるとともに、こいのぼりの掲揚場所が市内に点在する河川・沼などであることから、観光客の回遊性も促すことができるようになりました。また、地域の河川環境への啓発も同時に図ることができています。

平成16年、3回目となるこいのぼりの里まつりは、市制施行50周年の記念すべき年に行われました。さらにはこれを契機にギネス世界記録に挑戦し、館林の春の恒例イベントとしての認知度アップを図ることも目的とし、すべての市民と館林市が発展することを願い、鶴生田川上流、下流、近藤沼、つつじが岡パークインの4会場合計で、5

283匹のこいのぼりを掲揚しました。

国内では掲揚数で類を見ないことと、こいのぼりが日本独自の文化であることから、同年3月27日、こいのぼりの里館林実行委員会は8万市民とともに「世界一のこいのぼりの里」を宣言しました。そしてギネス世界記録に申請することになるのですが、当時、英国のギネス社へ直接の申請を試みたことから、大変な苦勞がありました。

英文での申請、方法・形式・部門はどのようなものか、さらにはこいのぼりが日本独自の文化であるため、どのように表現し、理解していただくか、非常に時間がかかりました。幸い、当時本市にはオーストラリア人の国際交流職員がおりましたので、その職員の協力により直接問い合わせをし、申請に関するすべてのノウハウを電話や電子メールでやりとりすることができました。

やはり「こいのぼり」というものが、なかなか理解してもらえず、認定の際の一番難しい部分であったというエピソードがあります。結局、こいのぼりの英訳が「Most Wind Socks」（風向表示用吹き流し）とされ、一つの地域

で同時に一番多く掲揚されているとしてギネス世界記録に認定されました。認定日は奇しくも掲揚から1年後の平成17年、端午の節句の5月5日でした。

館林の観光名所に

世界記録認定後は、毎年徐々に掲揚数を増やし、マスコミにも多数取り上げていただくなど、「館林の春は桜とこいのぼりで始まる」恒例イベントとして定着してきています。

また、平成20年の第7回のまつりでは、6000匹を超える掲揚数になり、今では全国各地から観光客をお迎えできるイベントへと成長してきました。平成23年は東日本大震災直後のことでもあり、一旦はまつりを中止しましたが、全国の皆様から「このような時だからこそ元気に泳ぐこいのぼりを見て勇気もらいたい」という励ましの言葉をいただき、市役所南側の鶴生田川メイン会場のみ掲揚しました。

勇壮な武者行列がギネス世界記録に ―信玄公祭り、「侍」1061人が集結―



公益社団法人やまなし観光推進機構 専務理事 ● 窪田克一

国内最大規模のよるい武者祭り

山梨の春の観光シーズンの幕開けを告げる祭りとして、毎年4月の第1土曜日を中心に開催される「信玄公祭り甲州軍団出陣」は、広く県内外から多くの観光客が訪れ、歴史ファンを魅了しています。祭りは山梨県を代表する戦国の武将、武田信玄の遺徳を偲ぶ行事として、今年、42回目を数え全国でも類を見ない特色のある地域のイベントとして定着してきています。

この「信玄公祭り甲州軍団出陣」のはじまりは昭和40年代半ばにさかのぼります。昭和45年、県や市及び観光団体等が「郷土愛の精神をより深め、県民文化を盛り上げる」、「豊かな文化財等の歴史的資源を観光振興に結びつける」など歴史観光振興による地域づくりの方針を示しました。また、毎年4月12日の武田神社の例大祭において行われてきた「武田二十四将騎馬行列」と、甲府市の商業振興策として実施されていた「甲府信玄祭り」

を統合し、郷土の新たな歴史祭りを創設する方針も示しました。

一方、前年の昭和44年には川中島の合戦を描いたNHKの大河ドラマ「天と地と」の放映により信玄ブームが訪れ、昭和45年春に全国から多くの観光客が訪れるお祭りにしようと、川中島の合戦へ出陣した甲州軍団の勇姿を甲府の街に再現させるといふ壮大なプランが描かれ、本県の新たな魅力づくりの一環として「信玄公祭り甲州軍団出陣」が始まりました。

「甲州軍団出陣」には、地域の企業、団体や住民が協働して祭りを盛り上げると同時に相互の連帯感や絆を強め、地域の魅力づくりに関わっていくという目的がありました。このため祭りには多くの県民が参画し、様々な工夫が行われ、県内各地域から総勢1300人の軍団が本陣の甲府・舞鶴公園へ集結し、武田二十四将全軍が勢ぞろいしたあと、夕闇せまる大通りに50基のかがり火が点火され、二十四将の大軍団の行進が約2時間近く続く戦国時代を再現した勇壮なお祭りとなってい

ます。

その後、米国・ハワイ州における「アロハ・フェスティバル」への「出陣」等、海外への遠征によるPR活動などを積極的に行ってきました。また昭和63年にはNHK大河ドラマ「武田信玄」の放映により、再び信玄ブームが訪れました。

こうして参加総人数は約1500人と規模は拡大し、信玄公役に有名俳優を起用するなど創意工夫と試行錯誤を続け、国内最大規模のよるい武者祭りとして山梨県を代表するイベントとなってきました。

ギネス世界記録にチャレンジ

信玄公祭り実行委員会では、平成24年4月の41回目の開催に向け、「信玄公祭り甲州軍団出陣」を世界にアピールし、来場者の増加に加え、祭り参加者の誇りや意識の高揚を図るため、新たな魅力創造企画として「侍の世界最大集合記録」にチャレンジすることを決めました。

チャレンジはギネス・ワールド・レコードの本側窓口である地域活性化委員会への相談から始まりました。まず「侍」の条件をどのように定めるかという検討がギネス・ワールド・レコードのロンドン本部とのやりとりで行われ、これに3カ月以上かかりました。

その結果、「侍」の条件として次のような定義が定められました。①着物を着用、または着物の上に鎧を着用②鎧姿の場合は胴、草摺、脛当て、手甲を着用③頭に兜、額当て、烏帽子、竹製の編笠のうち1つを着用④刀は鞘に入れ、左の腰にさ



信玄公を中心とした甲州軍団



甲州軍団のパレード



観光客とのふれあいの様子

している⑤草鞋など、日本の伝統的な履き物をはいている—の5項目を満たしていることが条件となりました。この5条件を満たしていない場合や腕時計など戦国時代からかけ離れた現代的なものを身に着けていた場合は失格となり、記録から外される厳しい内容となりました。

「侍の最大集合記録」を達成

ギネス世界記録への挑戦当日である平成24年4月5日（土曜日）、快晴の中、午後から市内の随所に設けられた陣屋に県内の各市町村、企業、一般募集や外国人を含む観光客で構成された軍団が集結し、陣屋では市民や観光客との交流や記念撮影などが行われ、士気高揚を図りました。午後4時過ぎには騎馬30頭と武者約1500人が甲府駅南口を先頭に集結し始め、いよいよ記録への挑戦

です。

ギネスの公式認定には、ギネス・ワールド・レコードの専門員による判定が必要ことから公式認定員2名が午前中から判定する場所や計測に必要なビデオカメラ、写真等の撮影場所などのチェックを入念に行い、本番を迎えました。

認定時間は出陣行進の時間的制約から15分間となり、この間は行進を中断し、何人が前述の「侍」の条件を満たしているか一人ひとりチェックしながらカウンターで厳密に計測することとなります。このため計測にはロープで出陣軍団を区切り、エリアを特定した後、計測中にエリアから出入りはないか、入念に計測が続けられました。

特に計測により失格者の割合が計測エリア内にある挑戦者数の5%を超えると、たとえ人数が多くても挑戦自体が失格となってしまいます。また、その様子はビデオカメラが上空から記録し、判定

の証拠となります。

15分間の計測時間は、会場内アナウンスにより観客の皆さんに

も伝えられ、固唾をのんで見守りました。その後、多くの観客を前に軍団の勇壮な行列が再開され、帰陣式が行われる舞鶴城公園へ集結しました。

公式認定員は計測後、資料やビデオなどを点検しながら最終判定の検討を行い、集計、検討に要した時間は約1時間。公式認定員からは「数名の失格者がいましたが、挑戦自体はギネス世界記録として条件をクリアしていました。公式の『侍』人数は1061名、これをギネス世界記録として認定します」と信玄公祭り実行委員会に伝えられ、「侍の最大集合記録」が達成された瞬間でした。

今後の発展

「信玄公祭り甲州軍団出陣」祭りは、県民総参加によりこれまで長年にわたり観光地域づくりの祭りとして、継続、維持されてきました。

ギネス世界記録達成の大きな意義は、内部的には祭りの開催に対する誇りと自信を高め、対外的には多くのメディアによる世界への情報発信で国内外からの観光客誘致に弾みがつくことです。今後、信玄公祭り実行委

員会では、富士山の世界文化遺産登録も追い風にしながら、来年度の43回目の「出陣」に向け、インバウンド観光客の誘致をめざしPR活動をさらに積極的に展開していく考えです。

市民と共に886人の「世界一長い乾杯リレー」 —自らのまちに誇りを、新潟・燕三条地域—



一般社団法人燕三条青年会議所
2012年度理事長

●五十嵐利行

金属加工技術と豊かな農産物

新潟県の一般社団法人・燕三条青年会議所は地域の青年経済人で構成する異業種の集まりです。現在、会員は140名ほどになり、「明るく豊かな燕三条地域の実現」を目指して様々な活動を展開しています。

当会議所では2012年に「ギネスブックを活用してまちおこしをしたい!」をテーマに考え、行きたい事業が「世界一長い乾杯リレー」でした。目的は燕三条地域の人々が自分のまちを誇りに思い、愛着心が芽生えること。ある意味、この目的が達成できるのであればどんな事業でもよかったのです。地域の人々がまちに愛着を持てることは結果としてまちの発展につながると考えたわけです。

新潟県の県央部に位置する燕三条地域は歴史的に金属加工技術が発達し、金属加工の企業や職人が多く存在し、世界に誇れる技術があります。こ

の金属加工の技術をまちの魅力として発信する事業を考えることもできましたが、既に地域に住む人々もよくわかっている、当たり前のことをやっても面白くないし、新鮮さがありません。そこで違う観点での燕三条地域ならではの魅力がないかと考え、たどり着いたキーワードが「農業」でした。調べていくと、燕三条地域は全国的にも珍しいほどの「農作物の多品目生産地域」であることがわかりました。燕三条地域は数千年にわたり信濃川がもたらした土壌からなる「三角州地帯」であり、この豊かな土壌が多品種の農作物の栽培を可能にしています。

燕三条で育った人たちにとっては当たり前すぎるのか、その魅力に気づいている人はほとんどいません。この多品種の農作物を「一つの形」にして地域の魅力として発信できないかと考え、燕三条産の農作物を利用したミックスジュースを考案。そのジュースを金属加工の文化が生んだピカピカに磨かれた「ステンレスカップ」に注ぎ、「この地域はこんなに素晴らしいんだ!」ということ

を地域の皆さんに再認識してもらえよう今回の企画を考えました。

ミックスジュースに想いを託し

燕三条地域は三条市、燕市と別々の行政区ですが、それを一つとして見て、「燕三条」と言われる地域です。また近隣の加茂市、弥彦村なども含めて「県央地域」と言われることもあります。我々はこの各市町村が一つになることで様々なスケールメリットが生まれ、まちの発展につながると確信しています。

上越新幹線の駅も「燕三条駅」と命名され、他地域からは三条市、燕市でなく「燕三条」として認知されています。三条市と燕市は共に金属加工の文化や技術を持っています。この地域の宝とも言える魅力を行政、商工会議所などの団体が「各々で」発信しています。同じような産業、文化を持つこの二つが合わされば、様々なスケールメリットが期待でき、新たな魅力も誕生します。

これからこの地域を担っていく覚悟を持った集まりである青年会議所の声として地域の人たちへそのことを伝えたいと思い、それぞれの魅力を混ぜた「ミックスジュース」にこの想いを託しました。

三条、燕、一体で成し遂げる

三条市では「和梨」がよく収穫されています。燕市では「トマト」。弥彦村では「葡萄」です。このほかにも「さつまいも、小松菜、キャベツ」など燕三条地域で収穫された様々な農作物を配合



乾杯リレーの本番の様子。参加者同士が乾杯で繋いでいく。挑戦中はトイレで中座することも、その場にしゃがみこむこともできない



参加者の顔写真モザイクで作成した記念看板。現在もJR燕三条駅に展示されている



燕市の金属磨き職人が作成したステンレスエコカップと燕三条地域の農作物をミックスした「燕菜三果ジュース」。ジュースは真空のビニールチューブに入れ、カップとともに参加者全員に配られた

真でモザイク画を作り看板に刻みました。この看板は現在も駅に飾られており、毎日のように数十人、数百人の人が目にしていることでしょう。

この看板を通じて、地域外の方々に燕三条の魅力を感じてもらい、その声が外から内に入ることで、燕三条への誇りと愛着が育まれます。我々、燕三条青年会議所は今後も「燕三条」にこだわって、明るい豊かなまち「燕三条」を目指して様々な活動を展開していきます。

しましたが、それは「この地域ではこんなものまで出来るんだ」ということに気づいてほしかったからです。

その想いを一つのジュースに託したわけです。出来上がったジュースは甘く、とてもおいしいジュースになりました。また公募により、地元の子どもがこのジュースを「燕菜三果」（えんさいさんか）と名付けてくれました。三条市の果物と燕市の野菜とが合わさって名付けられた名です。この燕菜三果の誕生を祝い、行政区に関係なく燕三条地域の人々をはじめとする886名で世界一長い乾杯リレーを成し遂げることに意味があったのです。

地域の玄関、 新幹線「燕三条駅」で開催

我々も含め、このような恵まれた土壌の地で育ったことは意識しなければ気づかぬままだったかもしれません。それは生まれ持って当たり前のことだから気づきにくいことなのかもしれません。これに限らず、地元の魅力は自分で気づく

ではなく、外部の人から羨ましがられて初めて気づかされ、それがやがて自分の住む地域への誇りや愛着につながるのではないかと思います。

それには外部の人にこの企画を知ってもらう必要がありました。燕三条地域は金属加工業が多くある影響で、多くのビジネスマンが行き来する地域でもあります。その玄関口となるのが上越新幹線の「燕三条駅」です。地域外の人へ発信するにはここが一番効果的だと考えました。駅にも何度かお願いをし、幸いにも燕三条駅としても開業30周年を祝う年でもあり、そのお祝いも兼ねた形で2012年11月10日、「世界一長い乾杯リレー」の開催に至りました。

青年会議所では当初、千人を目標に市民の参加を募り、当日は913人が集合。参加者同士が緊張しながら乾杯をつなぎ、見事に成功しましたが、ギネスブック側の認定員のチェックもあり、記録は886人でした。

しかし、この記録はそれまでの世界記録（487人。米カリフォルニア州ナパヴァレーでのワイ

ンの乾杯リレー）を大きく上回り、ギネスブックに新たな世界記録として登録されました。当日の様子は、新聞やテレビなど多くのメディアによって広く発信することができました。しかし、この発信による効果は一時的なものであり、数カ月も経てば風化してしまうことも感じていました。

駅に大看板、記録達成の証に

そこで何か証が残せないか。「ギネスブック」という証もありますが、自分からギネスブックを探索しなければ、思い出すことはないでしょう。その証を見るたびに地域内外に発信でき、外からの声で地域の人たちに地元への誇りと愛着を提供できる方法はないか、と悩みました。

やがて生まれたアイデアが「燕三条世界一」と書かれた大きな看板です。この看板をより多くの地域外の人たちに見ていただきたいと考え、燕三条駅の改札の中に設置しました。また、この挑戦に参加した人々にもこだわり、参加者全員の顔写真でモザイク画を作り看板に刻みました。

鍵盤ハーモニカ、小学生688人で同時演奏 —ギネス世界記録達成、地域の大きな自信に—



浜松北地域まちづくり協議会 会長

・波多野千津子

何かやってみよう

地域の住民などで構成する「浜松北地域まちづくり協議会」は、平成24年3月に設立された新しい団体である。浜松北地域の未来のまちづくりを担えるような団体になろうと行政と協働するなかで活動を始めたが、なにぶん新しい組織であるため、当初は何から何まで手探りの状態であった。そして、最も問題であったことは、私達に対する地域の認知度の低さと会員不足だった。

私達には「子どもたちが、夢や希望を持てる地域にしたい」という大きな目標がある。全てが手探りのなかでも「何かやってみよう」と会議を重ねるうち、いくつかの構想が浮かんできた。その一つが「鍵盤ハーモニカを使ったギネス世界記録」への挑戦であった。

静岡県浜松市は楽器産業が盛んな地域である。特に鍵盤ハーモニカは浜松市が発祥の地で、全国の小学生が使うほとんどが浜松産である。このよ

うな特徴を地域の子ども達に知ってもらい、地域と私達が共に成長できればと考えたのである。

・子ども達に地域産業を知ってもらうことで、地域に愛着を持ってもらう。

・子ども達と地域が一つの目標に向かって取り組むことで、子ども同士や地域との新たな絆をつくろう。

・私達「浜松北地域まちづくり協議会」を、地域の方に知ってもらおう。

これらがギネス世界記録に挑戦する狙いだった。

挑戦のはじまり

実は当初、取り組みに対する議論が割れた。私達にノウハウや資金が不足していることはもちろん、経験の少ない中で「ギネス世界記録」という大きな目標に挑戦することへの恐怖心があったからである。何から手をつければよいか分からない私達は、協議会の設立をサポートしていただいた浜松市の北区役所に相談してみることにした。

すると、有力な情報を得ることができた。市では「みんなのはままつ創造プロジェクト」の事業提案を募集しているというのである。採択されれば一気に資金面での課題を解決することができ。さらに、職員の側面からのサポートも約束してくれた。これで、ノウハウ不足に対する不安もある程度払拭された。しかも、浜松北地域で毎年開催されている「北区Deまつり」の会場で挑戦してはどうかという新たな提案もいただくことができた。より多くの方の前で挑戦すれば、より高い効果が得られるはずである。

私達は早速、市に対して事業提案を行うこととした。平成24年8月、市から事業採択の通知が届き、私達の挑戦が始まった。本番まであと7カ月である。

高まるハードル、地域ぐるみで克服

挑戦する内容は、鍵盤ハーモニカで5分間、楽曲「キラキラ星」を158人以上の小学生が演奏し続けること。区内の小学生は約5千人であることから、希望者を募ることで十分達成できるものと見込んでいた。ところが、事前調整を進める中で、最新の記録が664人であることが判明し、一気に挑戦のハードルが上がった。記録達成はそんなに甘くはない。

まず私達は、挑戦者の募集から始めることにした。自分達だけで募集するには限界があるため、区内の各小学校への訪問や校長会、音楽主任の先生方の会議の場をお借りして、挑戦の趣旨の説明に奔走した。私達の思いが伝わり、各学校によ



挑戦会場に入場する小学生。立会人や誘導員に、地域の大学生や中学生がボランティアとして参加した



多くの観衆が見守る中、結果を発表する公式認定員。ギネス世界記録達成！



終了後の記念撮影。参加した子ども達の笑顔に、これまでの疲れも吹き飛んだ

今、私達「浜松北地域まちづくり協議会」は大学生との連携により、小学生の地域愛を育むために地域資源を巡ってもらう事業や、私達の地域を広く知ってもらうための情報発信事業に取り組んでいる。ギネス世界記録達成の時の弾んだ笑顔の小学生たちが、「この地域に育ってよかった」と思えるようなまちづくりを目指している。

最終的に、小学生の参加申し込みは780人となり、ようやく記録達成の目的が立った。演奏の練習も順調ということで、挑戦の日を待つばかりとなった。

一方で、ギネス世界記録への挑戦は、ギネス社の定める規定に沿って進めるために、規定をクリアするための設備経費が必要となった。予備的な財源を持たない私達には大きな負担であったが、市内の楽器メーカーから協賛金をいただけることとなった。しかも、当日に使用する鍵盤ハーモニカのメンテナンスまで支援していただけたという。また、挑戦時の立会人や誘導員等、多くの人員が必要になったが、近隣の常葉大学や中学校の協力を得ることができた。

主催者の私達にできることは応援することのみである。懸命に鍵盤ハーモニカを吹く小学生を応援し続けた。浜松市長も応援に駆けつけてくれた。

挑戦当日、ボランティアの大学生に誘導されて小学生が受け付けを済ませていく。蔓延しているインフルエンザの影響で、想定より大幅に少ない712人が挑戦会場に入場した。多くのテレビカメラの前で緊張したのか、挑戦前の合同練習では演奏が一つの楽曲にならず不安がよぎる。指揮者の指示で揃った演奏ができるようになり、「北区Deまつり」に集まった約2万人の観衆の応援を受けて挑戦が始まった。

ギネス世界記録への挑戦は各種メディアで扱われ、参加した小学生や関係者の達成感を倍増させたほか、私達の活動を広く知っていただく最高の機会となった。また、記録達成は、「音楽創造都市」を目指す浜松市にとって大きな勲章となったものと自負している。さらに、地域の学校やボランティア、行政との協働を得て成功できたことは、歴史の浅い私達にとって大きな自信と経験にもなった。何より、参加した小学生が力を合わせて目的を達成した経験は、何ものにも替えがたいものである。

参加者のとりまとめや当日指揮する先生の手配、挑戦する小学生への随時、挑戦のための個別練習指導等、全面的な協力をいただけることになった。

となった。

ハラハラ、ドキドキのギネス挑戦

挑戦終了。公式認定員による集計時間が長く感じられる。発表された公式記録は688人。ギネス世界記録に認定！「やったー！」。会場全体が歓声と笑顔に包まれた。

記録達成、大きな自信に

闇に浮かぶ幻想的な棚田の風景 —LED電球2万個でイルミネーション—

輪島市観光課観光係 ● 古戸直美

世界農業遺産のシンボル、
白米千枚田

石川県輪島市の白米（しろよね）千枚田は、1004枚の田んぼからなる棚田です。日本の農業の原風景ともいえる白米千枚田ですが、田の平均面積が18平方メートルと小さいため機械による効率化が図れず、ほとんどが昔ながらの人力による過酷な作業となっています。

後継者不足と高齢化も重なり地元農家だけでは耕作を続けていくことが難しく、現在は多くのボランティアの方と白米千枚田オーナー制度のオーナー会員の支援を受けながら耕作が維持され、平成13年に国の名勝に指定された美しい景観が保全されています。オーナー制度の特別名誉会員には、小泉純一郎氏、小泉進次郎氏、永井豪氏（輪島市出身の漫画家）が就任されています。また、平成23年に国内で初めて世界農業遺産に認定された「能登の里山里海」のシンボルの存在となっています。

「あぜの万燈」と「あぜのきらめき」

平成19年に発生した能登半島地震で輪島市は甚大な被害を受けました。風評被害も大きく、観光客数も激減しました。そうしたイメージを払拭するキャンペーンとして、平成20年に千枚田のあぜを3万個のキャンドルで彩るイルミネーションイベント「あぜの万燈（あかり）」を開催しました。このとき想像以上の幻想的な空間が醸し出され、お客様には大変好評で、一晚限りでなく複数日の開催を希望する声が多く寄せられました。

しかし、キャンドルでは準備や後片付けに大勢の人数と労力を必要とし、複数日開催は極めて困難なため、他の方法について苦心した結果、市内に工場がある電子部品メーカーの協力が得られ、太陽光発電によりLEDが点灯する「ペットボトル」の共同開発に成功しました。

平成23年には、そのLEDをあぜに設置すること、日中は太陽光エネルギーで蓄電し、暗くなると自動的に点灯する、世界的にも例がないイルミネーションイベント「あぜのきらめき」を初めて開催しました。当時は、1万2000個のLEDを千枚田のあぜに設置し、自然の形状を生かして作られている棚田の風景を醸し出しました。そして世界農業遺産認定の目的の一つになっている地球環境に優しいという条件に合致し、千枚田の美しいあぜの幾何学模様を彩るイルミネーションイベントになっています。

また、「もったいない」「ありがとう」「夢」をテーマに、地元の小学生・中学生にメッセージを書いてもらい、ソーラーLED装置（ペットボトル）1個1個につけました。

光の海の中の散策を楽しみながら、子供たちのメッセージを読んで、改めて物の大切さや、感謝の気持ちを少しでも考えてもらえたと思っています。



これ一つで発電・蓄電・発光の機能があるペットボトル。中央部に小さなLED電球がある



あぜのきらめき

ギネスへの挑戦

輪島市では、過去にも「ギネス世界記録」への挑戦を試みたことがありましたが、残念ながら世界一という壁は高く、断念していました。



ギネス世界記録の認定証を受ける梶文秋・輪島市長（左）

全国各地・世界各国で、LEDを使用したイルミネーションイベントは数多くあり、数量にしても何百万個という莫大なものです。しかし、それは電源を商業電力とし、配線により発光しているもので、輪島市の「ペットボトル」のように一個の装置の中に発電・充電・発光という機能を内包し、全てが自然エネルギーによるイルミネーションイベントは、世界中どこにも見あたりませんでした。この分野でなら「世界一」と言えるのではないかと考えました。東日本大震災もあって自然エネルギーが見直されている中、「ギネス世界記録」に認定されれば、そのすばらしさを広く世界に伝えることができると同時に、輪島白米千枚田を多くの方に知ってもらえると考え、「ギネス世界記録」に挑戦することにしました。

記録達成への壁

「新規カテゴリー」で挑戦しましたので、もちろんお手本となる事例はありません

した。そのため、用意する資料や、認定に当たって公平な立場でソーラーLED装置をみてもらう証人探しなど、一つ一つギネス社に確認しながら、平成24年11月14日の挑戦の日まで忙しく動きまわった。

もっとも大変だったことは、挑戦内容が「太陽光発電LEDの最大のディスプレイ」というカテゴリーで挑戦したので、当然ディスプレイ全体を確認できなければなりません。

しかし、「白米の千枚田」は高低差が60メートルあるため、どうしても一部が陰になってしまい、1カ所からでは全てのディスプレイを確認することは不可能でした。

そこで、「白米千枚田の真ん中に高さ10メートルの櫓（やぐら）のようなものを建てられないか」「ヘリコプターを飛ばして、上空から確認することはできないか」との確認方法をギネス社の方から提案していただきましたが、冬の日本海側は風が強く、どちらも大変危険が伴うため確認方法として認められませんでした。

一度は、陰になる部分に設置されたLEDをあきらめることも考えましたが、多くのボランティアにLED設置の手伝いをしていただくのに、あきらめることは許されなれないと思い、ギネス社へ全てのディスプレイを確認できる「2カ所からの確認」を提案しました。

最初から公式認定員の派遣を希望していましたが、通常は1名の派遣。しかし、今回の挑戦のためにギネス社から2名の公式認定員を派遣していただき、全て（2万461個）のLEDをカウントすることができ、見事に世界記録に認定されました。

した。

ギネス社の配慮や、多くのボランティアの方々のご協力のたまものと感謝しています。

世界記録達成で観光客も大幅増

昨年秋に「ギネス世界記録に挑戦します」と発表した段階でも、多くのメディアから問い合わせがあり、新聞各社でも大きく報道され、問い合わせの電話が前年の倍以上に増えました。

昨年の「あぜのきらめき」開催期間中（100日間）のお客様人数ですが、当初は前年の数値を基に約4万7000人を見込んでいましたが、実績は見込みを大きく上回る約7万人となりました。長年の大きな課題でありました冬の誘客対策として大変効果があり、北陸新幹線金沢開業に向け能登への誘客に繋がると考えています。

千枚田の地元である南志見活性化事業組合が「輪島・白米千枚田あぜのきらめき」期間中に実施しました「スूप&カフェ」の販売も、目標の1万食を超え、地元にも経済効果と活性化に向けた気運の高まりをもたらしました。

今年は「あぜの万燈」が10月19日（土）に、「あぜのきらめき」が11月9日（土）（翌年3月16日（日）まで128日間開催されます。

クリスマス・バレンタイン・ホワイトデーイベントも開催する予定です。輪島白米千枚田にぜひお越しいただき、美しいイルミネーションを体感してください。

「けん玉」で魅力あるまちづくり —大阪・此花区、ギネス世界記録も達成—

大阪市此花区市民協働課このはな魅力発信担当課長 ● 馬場正敏

世界記録達成の瞬間

「ただ今の記録242名が新たにギネス世界記録に認定されました。おめでとうございます」

ギネスワールドレコードジャパンの2名の公式認定員がマイクを握り、みんなが見守る中、「The most people catching a kendama ball (最多人数のとめけん)」というギネス世界記録が認定されたことを発表した。



けん玉とギネス認定書を手にする筆者

一瞬、会場は「あゝ、やったな」という安堵の雰囲気になった。けん玉とめけん挑戦から発表まで、随分、間があったからだろう。その様子を見て、大阪

市此花区の西原昇区長が「皆さん、もっと喜びましょうよ」と呼びかけた。その言葉に促されるように、会場内は割れんばかりの拍手と歓声に包まれた。

2013年（平成25年）1月20日（土）、大阪市此花スポーツセンターでの出来事である。

なぜ「けん玉」なのか

2012年（平成24年）8月に大阪市24区に公募区長制が導入され、此花区でも西原氏が区長に就任した。新しい発想で次々に様々な提案を行っていた新区長だが、その中のひとつに「けん玉で何かできないか」という考えがあった。

西原区長は就任直後に区役所職員の特技や趣味も含めていろいろ職員のことを知りたいとして、区職員一人ひとりに個人プロフィールの提出を求めた。その中に、日本けん玉協会関西総支部でボランティアとして活躍している職員がいたのだ。もともと此花区は庶民的なまちであり、人口6

万6280人、世帯数3万75世帯（平成25年7月1日現在）である。区の面積は、16・94平方キロメートルで大阪市内でも2番目に大きな区だが、実際には、区西部は企業群やUSJ、舞洲、夢洲といった住宅地ではない土地が多い。歴史がある伝法地域や高見フローラルタウンもある。大阪湾に流れる淀川の左岸地域でもあり、若き芸術家が住む梅香地域などアート活動が盛んな面もあり、都心から近い割に物価は高くない。

そんな此花区には「けん玉」という庶民的な遊びが似合うのではないかと。せっかく区職員に得意な人材がいるのだから活かすことはできないか。そんな思いを持ち続けていた西原区長が、此花区の間図を眺めていてふと気がついたことがあった。「此花区の形はけん玉に似ていないか」と。

当時、新区長に取材に来ていた報道関係者にもその話をしたところ、「そうですね。言われてみれば似ていますね」ということになった。「これはいける！」。西原区長の号令により、区役所内に関連部署の担当者が集められ、打ち合わせが始まった。

けん玉講習会を開催、大きな目標も

まず最初に取り組んだのは「けん玉」を此花区に根付かせるために、区民、特に子ども達に「けん玉」を楽しんでもらうことである。そこで、「けん玉道場」と称するけん玉の講習会を開催することにした。また、「けん玉道場」を開催するにしても、何か目標となるものを掲げてみんなで盛り上げていくことができないかと検討が行われた。



「けん玉道場」の練習風景



ギネス挑戦当日、会場でけん玉の練習をする市民



記録達成後の記念撮影

そのとき、発案されたのが「ギネス世界記録への挑戦」である。しかし、区民に受け入れてもらえるかどうか、一抹の不安もあり、区の広報紙で周知することにした。

こうして「けん玉道場」の開催とともに、「けん玉とめけん1000人でギネス世界記録に挑戦」という取り組みが区民に周知されたのは、此花区の「広報このはな」の2012年11月号である。

◆◆◆ 242人が成功、ギネス世界記録に

いよいよ「けん玉とめけん」によるギネス世界記録への挑戦が本格的にスタートした。挑戦当日までに合計6回の「けん玉道場」が開催された。住民からは「挑戦したい」という申し込みが徐々に増えて、挑戦者は総勢386名となった。そして、本番当日の今年1月20日。けん玉「とめけん」という新しいジャンルによる世界記録への挑戦が

行われた。

総勢386人が同時にけん玉を操る。1回目。歓声とため息が入り混じる。ギネスワールドレコードジャパンの2名の公式認定員による成功者のカウント。2回目。またもや、歓声とため息。1回目とほぼ同じような人数が成功したように見える。再び公式認定員によるカウント。

カウント終了後、どうやら1000人を超えたらしいとの雰囲気包まれる。総勢386人中、目視では半数以上の挑戦者がとめけんに成功したように見える。公式認定員がイギリス本部に電話連絡。そして、発表。1回目が241名。2回目が242名。見事、ギネス世界記録達成だ。「此花」が「けん玉とめけん」で「ギネス世界記録を持つまち」になったのだ。

◆◆◆ けん玉で地域の活性化を

けん玉によるギネス世界記録への挑戦は、確かに一定の盛り上がりを見せた。しかし、まだまだ区民が日常的に「けん玉」で遊んだり、幼稚園や小中学校などが当たり前のように「けん玉」に取り組んでいるというところまではいっていない。それどころか、此花区内外にまだ十分に「ギネス世界記録を持つまち」であることを周知し切れていないと思われる。

「けん玉」は子どもから高齢者まで楽しむことができるし、障がいのある方や外国人でもできる。場所もとらないし、気軽に夢中になれるモノである。「けん玉」をネタにして会話が生まれ、世代間交流や親子のふれあい、友達や仲間づくりにも活用できる。

ギネス世界記録自体は目的ではなく、地域の活性化の手段として利用したものである。そういう意味で、世界記録を保有していることを誇りにしつつも、地域の活性化に向けた本当の取り組みは始まったばかりであることを心していきたい。

今後は、此花区が「けん玉とめけん242人ギネス世界記録」を持つているまちであることを区民等に積極的にアピールすることで、此花区が魅力的なまちであると思っていいただき、その結果、此花区に愛着を持っていただけのよう

ビールの空き缶で世界最大のオブジェ製作 ―日本一の山城「高取城」をモデルに―



NPO法人「住民の力」理事長
天の川実行委員会 代表

● 野村幸治

ギネス挑戦の経緯

奈良県高取町の主産業は明治以来、製薬・売薬業でした。しかし、漢方薬主体の製薬・売薬業は、昭和40年ごろから西洋薬の飛躍的進歩とそれに伴う薬事法の規制強化などから次第に衰退し、町全体のにぎわいもなくなっていました。

こうした中で、平成18年1月に地域の活性化について町役場や既存の団体に頼らず、住民が主導して取り組んでいく任意団体「天の川実行委員会」が発足しました。

同実行委員会が春のイベントとして3月の1カ月間開催する「町家の雛めぐり」は今年7回目を迎え、観光客数は4万3040人に上りました。また秋のイベントである「町家の案山子めぐり」(10月1カ月間開催)には4回目の昨年、9188人の観光客が訪れました。

しかし、雛めぐりと案山子めぐり開催以外の月はほとんど観光客が来ない状況が続いていまし

た。このため平成23年10月、NPO法人「住民の力」と天の川実行委員会及び高取町一區自治会では、地域を活性化するための方策について話し合いました。この結果、世界一のものを何か作って地域おこしの起爆剤にしようということになり、挑戦できるカテゴリーを調べ、ビールの空き缶を使った世界一のオブジェを製作することを思い立ちました。

山城「高取城」を製作

高取町には日本一の山城「高取城」があります。この城は標高580メートル余りの高取山山上に築かれた国内では最大規模の山城です。1332年に築城されたのが始まりと伝えられ、現在も石垣などが残されています。いわば地元が誇る歴史遺産です。

そこで「住民の力」などは、この高取城の天守閣を空き缶で製作することになり、まずは設計図の作成に取り掛かりました。そして平成24年1月

からは、各自治会で3万8000個の空き缶回収作戦を開始し、5月末には目標の個数がほぼ集まりました。

いよいよ6月1日から石垣積みを開始しました。コンパネ(コンクリートパネル、コンクリートの型枠用の合板)を敷いた土台に、一番外側は見栄えを考え、キリンの淡麗グリーンラベルで統一し、合計3024個の空き缶を集積所からオブジェ設置場所に運び、接着し、重心を低くするためすべての缶に砂を入れて1段目の石垣積みからスタートしました。

炎天下での砂入れは、思った以上に困難な作業で、しかも雨の日は中止せざるを得ず1カ月弱かかり、漸く石垣の1段目が完成したのは7月9日でした。ギネス側が認めた証人に現場に来てもらって設計図と照らし合わせながら、1段目に使われた空き缶の個数を数えて確認し、報告書にサインをしてもらい写真を撮りました。

そして、8月17日からは中ノ重(三層の天守の真ん中部)を積み、作業に入り、高所のため危険が伴うことから経験者4人による作業になりました。また、現場で1段1段積むの



CGによる高取城の再現図(現在は石垣だけが残っている)



城の組み立て作業の様子



「高取城」完成時の記念写真



ギネス認定証

は危険なため、中ノ重5段及び上ノ重5段並びに
天守の屋根と窓は作業所で接合し、証人にも作業
所で確認してもらい、それを現場で持ち上げ積み
ました。

9月1日に証人2人に現場に来ていただき、最
終確認としてすべての空き缶の数を数えてもら
い、最終の個数が3万5679個であることを確
認。「ギネス世界記録挑戦に際する証人による証
明書」にサインしていただきました。

ギネス世界記録に認定

ギネス世界記録の認定を受けるには、ギネス社
所定の申請書や証人の証明書、個数を確認できる
写真、製作過程が分かるDVD等が必要で、しか
も全て英語での書類です。申請の手続きは、ギネ
ス・ワールド・レコードTM地域活性化委員会に
委託しました。

そして10月4日、ギネス社より2012（平成
24）年9月1日付けでギネス世界記録に認定され

た旨連絡があり「最大のアルミ缶オブジェは3万
5679個のビール缶で作られた」ことの認定証
が送られてきました。それまでのアルミ缶による
最大のオブジェはイタリアのビール会社が製作し
たラグビーボールのオブジェ（ビールの空き缶2
万76個を使用）でしたが、高取町はこれを大きく
上回りました。

オブジェ製作に約500人が参加

このギネス記録への挑戦には様々な関係者がか
わり、惜しみない協力をいただきました。まず
空き缶の回収では高取町内の7自治会962軒の
家に協力を呼び掛け、うち380軒が空き缶の回
収に協力していただき、最終的に3万2520個
が集まりました。

またキリンビール奈良支社が7700個、町内
の企業である米田薬品工業が1500個の空き缶
をそれぞれ回収しました。

さらに5月21日から8月31日までの長期間にわ

たり、空き缶1000個のパーツ作りのほか、空き
缶積み作業や寄付金集め、空き缶積み用の詳細な
設計図の作成、写真やビデオ撮影、冷やし麦茶や
お菓子の用意などの後方支援などに延べ487人
が参加されました。これらの参加者はいずれも60
歳〜84歳までの高齢者です。

知名度アップに貢献、経済効果も

このようにギネス世界記録の達成は多くの地域
住民の協力によって成し遂げられましたが、オブ
ジェを製作する過程で地域の一体感が醸成された
ほか、以下のような様々な効果も生み出しました。

（１）多数の観光客が来訪

高取城のオブジェへの観光客数は10月13日〜11
月14日で8249人になりました。観光客へのア
ンケート調査によると、高取町内で使った金額は
1人当たり1419円でした。直接経済効果（町
に落ちたおカネ）を計算すると、8249人（観
光客数）×1419円（1人当たりの消費金額）＝
1170万円になります。

（２）住民の地域活性化への関心が高まる

（３）高取町の知名度が大幅に上昇

高取町では初めて在京民放テレビの某社で全国
放映されるなど多数のテレビや新聞に報道され、
また週刊誌にも取り上げられるなど、高取町の知
名度アップに大きく貢献しました。

今後は、ギネス世界記録達成の経験も生かしつ
つ、地域の困りごとの解決は地域住民が解決して
いくといった自助や互助活動を通じ、自立する地
域社会の実現を目指していきます。

ギネスに挑み、平和の願いを世界に発信 —ひろしまフラワーフェスティバル—



ひろしまフラワーフェスティバル実行委員会
企画実施本部事務局長

・平尾圭司

被災地支援をテーマに

ひろしまフラワーフェスティバル（FF）は、広島市の平和記念公園と平和大通りを主会場に春のゴールデンウィークに開催される全国でも有数のお祭りです。8月6日の平和記念式典が、平和を祈念する「静」の祭典であるのに対し、新緑が映える5月3日から5日にかけて開かれるFFは生命感あふれる「動」の祭典と位置付けられています。

2011年の暮れ、京都清水寺で1年を象徴する文字として「絆」が選ばれました。同じ時期、翌年に開催される第36回FFの事務所開きがあり、約5カ月後に迫るFFの一つのテーマとして、東日本大震災復興支援を掲げることになりました。東北とは遠く離れた広島ですが、かつて大きな苦難を乗り越え、復興を果たした都市である、広島からのメッセージは欠かせないと考えました。「何かを表現するべき」というスタッフの共

通した思いを胸に、2012年のFFがスタートしました。折しも、この年は中国新聞社の創刊120周年でもありました。

ハンドシエイクチェーンで「絆」を表現

2月中旬、中国新聞社の社員から「絆を実感でき、世界に発信できるイベントでギネスに挑戦しよう」と提案があり、取り組みがスタートしました。ギネス東京事務所に、過去、多人数で行って記録を塗り替える可能性があるもののリストアップをお願いしました。数種類の種目がありましたが、どれも事前の練習が必要だったり、組織で行わなければ記録更新は叶わないものばかりでした。

FFには毎年、3日間で150万人を超える人出がありますが、単純に人が多いからといって簡単に何かを成し遂げられるものではありません。また、ギネスから取り寄せた資料には、全てを見渡せること、人数のカウントが確実に行われるこ

と、時間の制約など様々な規定があります。これら全ての条件を満たさなければ記録更新は認められず、世界に発信することもできません。検討を重ねた結果、「ハンドシエイクチェーン」という種目が浮上しました。参加者が身体の前で腕を交差させ、隣の人と手をつなぎ合うという「絆」というテーマにふさわしいものです。「こんな単純なもので？」—誰もがそう思いましたが、実際にやってみると、隣のひとの身長差や腕の長さの違いによって、規定の1分間を継続することは、なかなか難しいことがわかりました。

2012年3月の時点で、世界記録は264人。一日に数十万人の人が訪れるFFですから、人数は問題ないため、創刊120周年記念として、人



ギネス記録達成を喜ぶフラワーQueenと子供たち

と人のつながりを深める「こども結ぶキャンペーン」の一環として「ハンドシェイクチェーン」でギネスに挑戦することを決めました。

実施時間と会場選定が課題に

次は、開催日時と場所です。この時点で、ほとんどの企画は出揃っており、スタッフの配置も決まっていました。限られた予算の中では、これ以上スタッフを増員することはできません。現有人員でいかにして成し遂げるかが大きな課題になりました。

場所については、平和記念公園以外選択肢はありません。しかし、公園は被爆者にとつての聖地です。過度に賑やかなイベントは行えません。唯一、可能と思われる場所は、平和記念資料館の南側一帯ですが、ここにはカーネーションステージというFFのメインステージが仮設される観客のための空間です。どこかに空いたスペースと時間はないか。スタッフが会場図面とタイムスケジュールをにらんだ結果、5月3日のパレードが終了する午後3時30分から6時までならカーネーションステージのプログラム上、なんとか可能ながわかりました。さらに、この時間帯なら、パレード進行に携わっていたスタッフを集めることができます。目標は500人となりました。指揮役のスタッフの発案で、どうせやるなら単純な円形ではなく、手のひら型に繋がろうと複雑なものになりました。

600人が手を繋ぎ、記録達成

そしていよいよ当日。高所作業車に指揮スタッフと撮影スタッフが乗り込みます。スタッフは、参加者ひとりずつに手のつながり方をレクチャーし、ブロックごとにリハーサルを行って間隔を確認しました。ところが、想定よりも多い600人の参加者が集まったために、なかなか手のひら型になりません。時間だけが過ぎていきます。指の形が少し崩れましたが、なんとか繋がったところで1分間の計測開始。高所作業車の上では、たった今録画したビデオを確認。ギネスが派遣してきた認定スタッフの判断を、600人の参加者とスタッフが固唾を飲んで待ちますが、判定はNG。

3回のチャレンジが認められていますが、再度、参加者と呼ばか

けて手を繋ぎました。
2回目のチャレンジの結果を待つこと数分。やっとギネス認定スタッフからOKのサインがでました。しかし、ギネ



平和記念公園でハンドシェイクチェーンのギネス記録に挑む参加者



手をつなぐ参加者

ス本部に映像を送り、承認を得ないと、正式には認定されません。午後7時過ぎ、事務局にやっと記録を認定するという連絡が入りました。翌日の中国新聞には、ギネスチャレンジが成功したことが掲載され「核兵器のない世界を願った。世界一達成に家族で参加できた」と息子2人と参加した廿日市市の主婦中田博美さんの喜びの声も紹介されました。

僅か2カ月の準備期間で成し遂げたチャレンジは、広島の人たちがあの悲劇を忘れることなく、人と人との絆を大切に、震災復興支援の気持ちを持ち続ける一助になったと思います。また、平和のメッセージを広島から世界に発信するとうう、FF本来のテーマを成功させたことは、大きな成果だと確信しています。

イルミネーションの聖地・宇部を目指して —大学と自治体が連携、ギネスに挑む—



山口大学工学部附属ものづくり創成センター副センター長 ● 崎山智司

ときわ公園活性化がきっかけ

宇部市は、山口県中部の瀬戸内海に面した位置にあり、化学コンビナート群と山口大学医学部、工学部、宇部高専等がキャンパスを構える人口約17万人の工業・学園都市である。

宇部市には、常盤湖という湖を囲む189畧の広大なときわ公園がある。ここは「日本の都市公園100選」、「桜の名所100選」「美しい日本の歩きたくなるみち500選」にも選ばれており、また現代日本彫刻展（野外彫刻展）も開催され、花と緑と彫刻に彩られた総合公園として多くの市民、観光客が訪れる。

しかしながら入園者数は昭和44年の77万人をピークに平成20年には37万人まで落ち込んだ。このような状況に同年、宇部市を中心とする「ときわ公園まつり実行委員会」は活性化策の一つとしてイルミネーションコンテストを企画した。

一方、筆者の所属する山口大学は、平成20年

から次世代の理系人材育成を目的に、産学公民が連携し小中学生に科学の楽しさを伝える「長州科楽維新プロジェクト」をスタートさせた。このプロジェクトを始めるに当たり、小中学生でも楽しく参加できる科学技術に関するものづくりコンテスト、どうせなら宇部が聖地と呼ばれるような発展性のあるコンテストを実施しようということが決められた。

調査研究の結果、未だ聖地のないイルミネーションコンテストが選ばれた。この計画は、産学公連携の会合で宇部市長や市幹部職員にプレゼンされ、その数カ月後、山口大と市側が協働することとなった。

このような経緯から産学公民連携プロジェクトとして「TOKIWAファンタジアイルミネーションコンテスト」がスタートし、その目的は、理系人材育成とときわ公園活性化であり、目標は宇部を「イルミネーションコンテストと言えば宇部」と言われるイルミネーションの聖地とするこ

ないないづくしの中で

平成20年12月から約1カ月間、ときわ公園で第1回コンテストが開かれた。このコンテストは、手作りイルミネーションであれば誰もが参加できる。科学技術教育が目的の一つでもあるため、一般の企業・団体に加えて、多くの幼稚園、学校、子供会が参加してくれた。

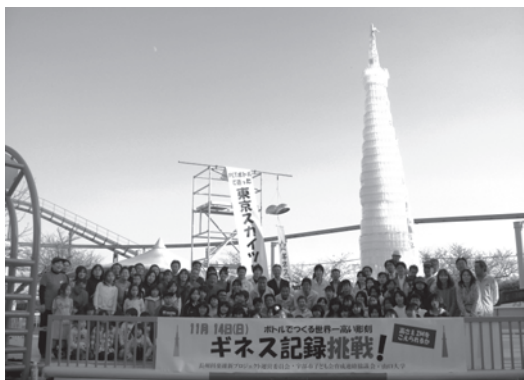
42作品が展示され、来場者も2万人を超え、初回としては、まずまずの成功であった。しかしながらイルミネーションの聖地を目指すには戦略不足で、関係者一同悩んだ。

コンテストを魅力的なものとし、参加者を増やし、さらにみんなに知ってもらう「仕掛け」が必要である。スタートしたばかりで協力者もあまりいない、イルミネーションもない、資金もない、「ないないづくし」の中で、これらの課題を解決するためにたどり着いたのがギネス挑戦であった。産学公民の中で新しいことを提案し挑戦するのが大学の役割なので、学生達が中心になりギネス挑戦を行うこととなった。

ギネス世界記録挑戦とその効果

我々がギネス挑戦に期待したことは①コンテストのブランド化、②参加者の増加とその意識の向上、③大々的な広報、をお金をかけずに実現することである。

まずブランド化については、他にはないときわ公園の特長をギネス挑戦に組み込み実現出来ない



第2代ボトル彫刻（東京スカイツリー、高さ11.4m）完成時の様子



第3代ボトル彫刻（ソユーズ、高さ11.9m）



世界一大きな郵便ポスト（体積68m³）の前でゴスペルを歌う様子

以上のようにギネス挑戦を続けた結果、初回のイルミネーションコンテストは出展作品数が42作品、来場者数約2万数千人であったのに対し、平成24年（5回目）には120作品、6万人の規模に急成長し、今や宇部市の冬の風物詩となっている。ギネス挑戦を有効に使うことにより、地域を活性化でき、子供達のものづくり教育も促進できることがわかった。

宇部市は平成22年にときわ公園活性化基本計画を策定し、総合的な活性化策を打ち出した。今後は我々もこれに協力しながら、そして、その中でギネス挑戦を続けながら「札幌と言えど雪まつり、宇部と言えどイルミネーション」と言われるべく努力したい。

かと考えた。具体的には、ときわ公園が野外彫刻で有名なため、彫刻と見なされるギネス建造物を作製し、その物体を電飾して世界一のイルミネーションを作るということである。この方針に則り、初年度（平成21年度）はギネス社と直接交渉し、「ボトルで作る世界一大きな彫刻」（以後ボトル彫刻とする）という彫刻分野の新しい挑戦種目を設けてもらった。さらに、聖地には「伝説」が必要とのことから毎年ギネス挑戦を行うことを申し合わせた。

平成21年度は「ボトル彫刻」として、約1万本のペットボトルを使用し、高さ約7・4メートルのピラミッドを作った。この記録は、すぐにコカ・コーラ社に抜かれたため、平成22年度は高さ11・4メートルの東京スカイツリーを作製し、更に23年度は高さ11・9メートルのソユーズロケットを作った。そして平成24年度は、挑戦種目を変更し、鉄の彫刻という観点から、高さ約7・2メートル、体積約68立方メートルの「世界一大きな郵便ポスト」を作製した。

いずれもLEDで装飾されコンテストのシンボルとして設置された。その迫力ある巨大イルミネーションは来場者に好評で、コンテスト終了時から「来年のギネスイルミネーションは？」との質問が多々あり、ブランド化に向けて順調に進んでいると感じている。

次に参加者の増加とその意識の向上については、関係ある方々を出来るだけ巻き込み、一緒に作業してもらう努力をしている。特に教育目的も達成するという点では学校や子供会等との協働は効果的である。ペットボトル集めや、ペットボトルブロック作製を親子で一緒に作業してもらう中で、子供達からは「お父さんやお母さんと一緒に仕事ができて楽しかった」、保護者からは「子供と充実した時間を過ごすことができた」と感謝の言葉を頂き、関係者一同大変うれしく思っている。

また、各種団体やボランティアの方々にも多大なご協力を頂いた。このように多くの方々と協働作業を行うことで、イベントへの参加意識や挑戦者

としての一体感を共有することができたと思う。大々的な広報については、ギネス挑戦はもとと大きな広報効果がある。ギネス挑戦を行うとほとんどの有名新聞、地方テレビの取材があり、新聞報道は毎年15〜20件、テレビ放映も毎年、十数本となった。

特に話題性のあるオブジェ（例えば東京スカイツリーや郵便ポスト）は、全国紙の1面やテレビの全国放送、有名雑誌で取り上げられた。これだけの広報がなんと言っても無料である。有名になると協力者も増え、資金も集まりやすくなる。ギネス挑戦の一番のメリットはこの無料の広報効果である。

来場者も急増、冬の風物詩に

ボトルキャップでギネスに挑戦 —1年で272万個回収し、世界記録に—



高松四十七年会 高松スマイルプロジェクト実行委員長

● 久本義展

高松四十七年会とは

「高松四十七年会」は昭和47年度生まれ(同年)のメンバーが、生まれ育った地元・高松をメインステージとし、自己のスキルアップやお互いを思いやる人間関係を構築しながら、「自慢できる故郷づくり」を目指し、平成13年(2001年)4月に非営利団体として発足しました。現在、メンバーは42人です

当時、私たちは30歳を目前に控え、自身が高松と歩んできた道を振り返り、そして、これから高松と歩んでいく未来を想像しました。様々な事柄に対し、ただ参加するのではなく、能動的に参画出来ているのだろうか。自己の利益や満足だけではなく、私たちを育んでくれた高松のために何か出来ることはないだろうか。

そこで私たちは、自ら企画、運営することを主体とし、自主的に参画すること、そして私たち自身が、高松という街により一層の関わりを持つこ

とが高松の新しい未来の第一歩に繋がり、私たち自身の成長にも繋がっていくのではないかと考えました。

こうして、まずチャレンジしたのは「高松まつり」総おどりへの出場でした。毎年開催されている「高松まつり」が、他県の祭りに比べて盛り上がり、に欠けているならば傍観者ではなく、祭りに参加して一緒に盛上げて楽しむことが、私たちの大きな役割なのではないかと考えたのでした。

「高松まつり」への参加を皮切りに、老化防止対策の一環として心身ともに健康であるために「アンチエイジング事業」、楽しみながら街の清掃活動を行うを合言葉とする「G・I・Mゴミッション・イン・ポッシブル」、高松の自慢できる穴場スポットを高松市内外に情報発信し、多くの方々に高松の良さを知っていただくためのツール「47バイブル」、また自ら学ぶ姿勢を大切に、会員のスキルアップを目標とした「47アカデミー」など様々な事業や啓蒙活動を企画し、チャレンジし

ました。

10周年記念でギネス挑戦

「高松四十七年会」ではかねてから、10周年を迎える年にはそれにふさわしい集大成的な事業を開催したいと考えていました。ミーティングを重ねた結果、「我らが高松を広くPRする」「高松の未来を創る子供たちに郷土愛を深めてもらう」「様々な人たちと関わりを持ち、メンバーのスキルアップに繋げる」ことを目的にペットボトルキャップを回収し、ギネスに挑戦しようという事業を立案しました。

そして事業終了後、そのボトルキャップを再資源化業者に売却し、その利益で世界の子供たちにより多くのポリオワクチンを届けることを最終目標にしました。

高松スマイルプロジェクト

平成22年(2010年)1月から「高松スマイルプロジェクト」が始動しました。高松市民の皆さんに参加していただくとうと、企業や団体をはじめ、幼稚園や小学校・中学校を直接メンバーが訪問し、ボトルキャップ回収の協力をお願いしました。

活動資金はメンバーの年会費ですので、いかに効率よく効果的な告知ができるかを全員で考えました。そこで、いろいろなイベント会場に足を運びPRし、より目を引くために「キャップマン」というキャラクターも登場させ、子供たちにも興



ギネス世界記録をめざし、氣勢を上げる様子（平成23年7月）



袋詰めしたボトルキャップを積み上げ、記念写真（平成24年10月、フィナーレイベントで）



モザイクアートでスマイルマークを浮かび上らせた様子（フィナーレイベントで）

味をもっていたきました。

また、ボトルキャップの回収BOXはメンバーが手作りし、キャップの投入口やどの程度キャップが集まっているのか一目でわかるように工夫しました。そして800個の回収BOXをガソリンスタンドやコミュニティセンターなど多くの方々の目に触れる場所に設置しました。

◆◆◆ 1年で272万個回収し、ギネス記録

広報活動も功を奏し、参加登録団体数は472となり、想像以上の個数を回収することができました。そして、平成23年7月から翌24年6月までの1年間に約272万個のボトルキャップを集め、これが24年9月、新たなジャンルである「1年間にもっともリサイクルされたペットボトルキャップの個数」(Most plastic bottle caps recycled in one year)として、ギネス世界記録

に認定されました。

個数計測は、毎月回収したキャップを大型の重量計で測り、キャップ一つの重さから全体の個数を計算しました。平成22年から平成24年の3年間で回収したキャップ総個数は、ギネス記録となった約272万個を含めて526万8807個（総重量は約12・5ト）となり、ポリオワクチン2万2200回分（111セット、1セットは200回分）と交換できることとなりました。

◆◆◆ ポリオワクチンを寄贈、感謝祭も

平成24年10月21日、高松市の「さぬきこどもの国」において、3年間の活動報告とともに香川ユニセフ協会にポリオワクチンを寄贈する式典と、ご協力いただいた皆さまに感謝を込めてフィナーレイベントを開催しました。

袋詰めにしたボトルキャップを積み上げて、約

4メートルとなるピラミッドの中央にギネス世界記録証を飾り、記念写真を撮れるようオブジェを制作しました。

そして、高松スマイルプロジェクトの名の通り、ご協力者の笑顔の写真を560枚つなぎ合わせてモザイクアートでスマイルマークを浮かび上げる演出をしました。

会場内では、子供たちにもわかりやすいサイクルの説明、実際に使用後のペットボトルを利用した遊びを体験できるブースなど、子供たちを対象にしたイベントを開催しました。また、当日に持参したボトルキャップと交換できる飲食ブースなども設けて感謝の気持ちを伝えました。

◆◆◆ 「自慢できる故郷」をめざして

今回の活動は、高松市民の皆さんと一致協力することにより、目標の一つであったギネス記録に認定されることができました。そして、当初の思いである「高松」という街を少しでも認知していただくことができた非常に意味のある活動だったと感じています。これは、私たちだけでなく市民の皆さまにも自信や誇りとなり、「自慢できる故郷」になり得るものと信じております。

高松四十七年会は、今回の経験を活かしながら「だれかのために何かしたい」と思う気持ちで、生まれ育った街を少しでも活性化させ、「自慢できる故郷」を目指して活動してまいります。

心を一つに「1039人で1040脚」 —福岡・朝倉地域、つながりを「見える化」—



朝倉市観光協会 ● 里川 径一

「多人多脚」で世界記録樹立

2013年3月24日、福岡県朝倉地域（東峰村・筑前町・朝倉市）でギネス記録が作られました。挑戦した種目は多人多脚。二人三脚のように横一列に繋がって50メートル歩き切るといいます。当日集まったのは目標とした946人を大幅に超える1039人。集まった方々同士、その場で隣りの人と足を結び、肩を組んで横一列400メートル程に並んだ1040脚のチャレンジャー達は見事50メートル歩き切り、世界記録を樹立しました。

地域の力とは、いかに自分と人との繋がりを感ぜられるか、そしていかに互いが信じ合い繋がるかだと思います。それを「見える化」する大実験。それが今回の我々のギネスチャレンジだったのだと今、そう思っています。

きっかけは地域の青年達の思いつき

朝倉市では合併した7年前に若者たちを対象とした青年講座『僕らの楽校』が創設されました。『だれかの夢をみんなでかなえよう』を合言葉に様々な取り組みが展開され、ミステリーサイクリングツアー『僕らのあさくら』や、ローカル鉄道や地域の名所を舞台にした『朝倉婚活物語』など、青年達が地域の歴史や良さを学びながらイベントを実施。いつのまにか講座名が団体名となり、最近では『僕らの楽校』という青年ボランティア団体として注目されるようになりました。

そんな彼らがやりたいことのひとつ、それが多人多脚で世界記録を取るといふものでした。思い立った当初の世界記録は300人程度だったのですが、いつの間にか記録が「602人、603脚」となりすっかり諦めていました。そんな中、昨年、この地域を何とかしようと課題解決に立ちあがった朝倉市観光協会の若手理事らが企画したシンポジウムへの参加をきっかけに、今までにない新たな繋がりを得て、多人多脚で世界一を狙う企画が再浮上したのでした。

キーワードは（0946）、朝倉地域が一体に

我々が真っ先に考えたのはチームの名前です。世界記録を取るとギネスの認定書に団体名が記載されます。だったら参加したみんなが自分ごとと感ぜられる名前の新しい組織をつくりたい。日頃から我々はこの地域のことを何気なく朝倉市郡と言っていますが、耳を澄ますと郡部の方々は朝倉郡市と話していたりします。

どちらが上でどちらが下だなんて思っていないのですが……。また、「朝倉」を名称に入れるとなんだか隣接する東峰村・筑前町が他人事になってしまう気がします。せつかくの広域での繋がりが。この地域一帯の方々がみんな他人ごとにならない名前はないかと真剣に悩みました。

そんな中、ようやくたどり着いたのが東峰村・筑前町を含め朝倉地域で日常的に使っている「0946」という市外局番でした。「この地域の人々を一つにするアイコンはこれだ！」と確信。そして参加者が自分だと感じられるようにするために我々のチーム名は「（0946）ギネスチャレンジャーズ」に決まりました。また、参加者も「（0946）地域」にちなみ946人集めることを目標とし、イベントでは「（0946）地域」の良さを世界に発信すると意気込んだのでした。

大切なのは結び繋がること

イベント名には『結』の一字を入れました。理由は、このイベントを通じてさらに地域内の連



横一列に整列し、スタートを待つ参加者



参加者の足をタオルで結ぶスタッフ



記録達成後、認定書を受け取りガッツポーズする「(0946)ギネススーチャレンジャーズ」の代表(左端の男性)

携を深め、『結』の精神を大事にしたいとの思いからです。「なぜ、このイベントをやるのか?」。我々はこのことを相当話し合いました。そんな中で「足を結ぶものに意味を持たせよう」。そんなアイデアがでてきました。「地元の原鶴温泉を活性化したい」。そんな思いから足を結ぶものは提供を受けた温泉タオルを使うことにしました。

しかし、「もつと意味を持たせられないか?」「繋がり歩くことに加え『結』の精神を伝えるものはないか?」。そして、出会ったのが福岡県大野城市で考案された「逃げタオル運動」(玄関のポスト等にタオルを下げて避難完了を知らせる運動)でした。

避難所へ避難する際などポストにタオルの掛かっていない家を見つけ、「あそこの家のばあちゃん、まだ逃げとらんかもしれない!」と地域内の声かけ運動に繋がり、「自分の家はもう大丈夫、

他の家を検索して!」とのサインにもなる思いやりの活動です。

実は昨年夏、我々の住む「(0946)地域」も北部九州豪雨災害の被災地となり、今回のイベント会場である杷木原鶴放水路も開催が危ぶまれるほど被災の爪痕を残していました。私たちはこの運動に強く共感し、今回のギネス記録へのチャレンジでもこの逃げタオル運動を紹介、推進することになりました。この地域の良さを世界に発信する。逃げタオル運動のように繋がる『結』の精神の大切さを伝える。世界一を目指す! この3つが我々の活動の柱となりました。

繋がることで何でもできる!

資金ゼロ、経験ゼロから始まったチャレンジでしたが、地元企業の協賛などでなんとか資金も集

まり、心配だった参加者も地元高校生やスポーツ団体、この地を盛り上げ活性化したいと考えている方々、『逃げタオル運動』に共感された被災地の方々、女性消防団の方々など、結果1039人の参加者と3月24日の本番を迎えました。当日は雨の天気予報を覆す驚くほどの日本晴れ。下は小学校5年生、上は83歳の方まで共に繋がり、感動をわかちあうことができました。

なんだか不信感や不安感が多い世の中となってきましたが、まったく知らない者同士でも一つの目的があればしっかり繋がる。まだ我々の住む地域にはしっかりした繋がる素地があり、また今以上に繋がることを確信できました。

このイベントをきっかけに、「(0946)」を地域のアイコンとしてブランディングしようという動きや、情報の受発信で繋がりを深めようという『#(0946)チームあさナビ』という活動もはじまっています。

『僕らの楽校』の立ち上げから、今回のギネスチャレンジ結末までずっと関わってきた私は、いつの日か地域の結びつきの見える化を成し遂げたこの地で、地域としっかり繋がりが暮していればどんな不況や世界恐慌が起きようとも、国際マネーゲームに踊らされることなく安心して暮らしていける地域通貨や補完通貨の仕組みづくりを成し遂げたいと真剣に夢み、たくらんでいます。

からあげ供給量1トンをギネス記録達成 — 地域のために、地元F M局も奮闘 —



NOASF M (フリースエフエム) 統括本部長 ● 友松達哉

からあげの聖地

「大好きな食べ物に埋もれてみたい!」。これは多くの人が抱く妄想の1つかと思います。この楽しい妄想を現実化し、「1日の唐揚げ供給量でギネス認定」に挑戦したのが、大分県中津市で毎年9月に行われるイベント「からあげフェスティバル」(行政や地元企業などで構成する実行委員会主催)です。

開催地の大分県中津市は、「社団法人日本唐揚げ協会」が認定した「からあげの聖地」です。また隣接する宇佐市は「からあげ専門店発祥の地」と認められており、この両市を中心に大分県北・福岡県京築地区は、コンビニよりからあげ専門店の方が多い「からあげの一大地帯」となっています。そのからあげ専門店約30店舗が一堂に集結し、味比べを行うイベントが「からあげフェスティバル」です。近年のからあげブームを牽引しているこのイベントは、毎年約9万人の来場者があり、

その数は回を重ねることに増加傾向にあります。

郷土愛のための大切な使命

このイベントを運営する上で忘れてはならないことは、「子ども達が大人になって故郷を自慢できるように」と考え、始まったイベントであるということです。

九州の片田舎であるこの地域に住む高校生達には、大半が就職や進学で地元を離れていきます。そんな卒業生達が色々な人に出会い、自己紹介をする機会があると思います。「九州のどこ?」と聞かれた時に、「からあげで有名な町」と言え、「あつ、知ってる!」と返ってくることは、我々大人が考える以上に自信につながります。

そして家族がいる郷土を誇りに思ってくれることとでしょう。また、卒業生や既に巣立った地元OBの人が故郷の自慢をしてくれることは、マスメディアでも出来ない熱い口コミとして全国へ広がります。もちろん、地元に住む人達が県外に出か

けた時にも同じことが言えるでしょう。だからこそ、集客力がある「からあげフェスティバル」での妄想を現実化し、全国にPRできる「ギネス記録への挑戦」が、郷土愛のために必然、かつ使命となったのです。

ギネス認定までのポイントは15項目

フリースエフエムは「からあげフェスティバル」の運営を手掛けていますが、私どもが認定までに行った流れは①スポンサーとの企画会議②からあげの物量に関するギネス記録の調査③コンサルティング会社の選定④ギネス挑戦内容選定⑤実地の5W1Hスケジュール作成⑥スポンサー・行政機関への予算相談⑦ギネス挑戦監査団体の選定⑧実施のための参加団体の選定と相談⑨実施前のプレスリリース⑩挑戦試験シミュレーション⑪当日のギネス記録挑戦⑫ギネス社への申請⑬ギネス認定証の受領⑭ギネス記録認定の報告プレスリリース⑮ギネス認定の祝賀会(関係者記念パーティー)の15項目です。

流れをかいまみますと、①で主催イベントスポンサーのイオンモール様より熱い応援を頂き、色々な問題はさておき「とにかく出来るのか?」の調査からスタートすることにしました。

②③④で、挑戦するギネス記録項目を京都のコンサルティング会社に迅速・的確に調査していただきしました。からあげの海に埋もれるという妄想は、ほぼこの時点で確定となりました。

⑥の予算の問題が一番難関でしたが、イベントやギネス記録挑戦の根本趣旨を、スポンサー企業



からあげフェスティバルの会場の様子



記録更新時の計量。1076*と表示されている



記録達成後、1人350円でからあげの取り放題をしている様子。売り上げの一部は被災地への義捐金に充てられた

や大分県北部振興局にご理解いただけたため計画を進めることができました。

その後、⑦⑩の工程、そして⑤のスケジュールを2週単位でチェックし、何度もシミュレーションを重ね、2011年9月23日の挑戦当日を迎えました。

それまでのギネス記録は米国インディアナ州の供給量746^{キログラム}。当日は中津市の専門店の方々約100人が会場に集まり、からあげを手際よくつくっていききました。その結果、供給量は1076^{キログラム}と記録を大幅に更新し、無事にギネス世界記録を樹立することができました。

一般来場者の方へ記録を更新したからあげの販売も行いましたので、夢のからあげに埋もれることは出来ませんでした。生まれて初めて見た「からあげ約1トンのドリーム・マウンテン」は、関係者や来賓・イベント来場者を圧倒していました。

メディア使い、全国にPR

ギネス認定まで多大なる時間と労力を費やしたが自己満足に終わり、記録のニュースが埋没してしまっているケースも存在します。私どもの記録も、ある種の自己満足ではあります。ですが、関係者だけで盛り上がるのではやはり意味がありません。

重要なポイントがプレスリリースです。「全国にどうPRするか」が鍵になります。今回の「1日の唐揚げ供給量でギネス世界記録認定」は、全国メディア数社に取り上げられたほか、様々な雑誌やインターネットメディアにも掲載していただきました。

ポイントは「独自に全国メディアに働きかけること」です。プレスリリース専門業者にお金を支払い依頼する方法もありますが、私どもは直接テレビやラジオに取材依頼を行いました。多大なる時間と労力を無駄にしないためにも、リリースには丁寧に時間をかけました。これで全国にいる地元卒業生やOBの方々に映像や音が届き、この地域の口コミも広まりました。やはり皆、全国区の

TVに地元が出ると嬉しいものです。

地域の活性化に大きく貢献

現在、大手食品メーカーやコンビニエンスストアとタイアップして企画・監修した商品7品が一般社団法人日本唐揚げ協会、からあげ専門店、行政機関の協力により全国で販売されています。

週末には「グルメ観光」として、県外ナンバーの車が地域のからあげ店を訪れる風景も当たり前になり、そして県外でもからあげ主体のイベントを数多くプロデュースし、地域のPRを行う回数も増えました。

「からあげフェスティバル」で樹立したギネス記録は、からあげブームの一翼を担い、全国へ話題を提供できたと言えるでしょう。しかし一番の功績は、この記録・イベントを地元飲食業、観光業、企業、行政が「郷土の紹介」として利用でき、様々なものに形を変え、「地域の活性化」につなげることが出来たということです。

私どものコミュニティFMは民間企業ではありますが「地域のために」を企業コンセプトに掲げ運営しています。だからこそ、一過性の全国ブームに終わらせないように、様々な熱い企画を立て、進めています。全国数万人の地元卒業生やOBの皆様、地域の皆様にあたたかく見守っていただけると幸いです。

今年の「第6回からあげフェスティバル」は9月21日（土）・22日（日）です。皆さんのお越しをお待ちしています。

世界記憶遺産に「御堂関白記」など2件 「東寺百合文書」も推薦へ

文部科学省国際統括官付（日本ユネスコ国内委員会事務局）

記憶遺産とは

ユネスコ記憶遺産（Memory of the World）事業は、世界の記憶として重要な文書や絵画、フィルム等のドキュメント遺産の保護と振興を目的に、1992（平成4）年にユネスコが開始した事業です。

具体的には、世界的に重要なドキュメントをユネスコ記憶遺産としてリストに登録し、それらドキュメント遺産の保存を最もふさわしい技術を用いて促進すること、また、なるべく多くの人がアクセスできるように簡便化を図り、さらに、加盟国におけるドキュメント遺産の存在及び重要性への認識を高めていくことを目的としています。

ユネスコ記憶遺産の登録は、推薦物件の真正性、世界的な重要性、唯一性、代替不可性を考慮し、ユネスコ記憶遺産国際諮問委員会（IA

C）の審査を経て、ユネスコ事務局長がその可否を決定することとなっています。2013（平成25）年6月現在、ユネスコ記憶遺産の登録総数は300件になります。

「御堂関白記」と「慶長遣欧使節関係資料」が記憶遺産に

我が国では、2010（平成22）年に、日本ユネスコ国内委員会文化活動小委員会の下に、ユネスコ記憶遺産選考委員会を設置し、国としてユネスコに推薦する物件の選考等について検討を行っています。

2012（平成24）年3月に、日本ユネスコ国内委員会として初めてユネスコに推薦した「御堂関白記」及び「慶長遣欧使節関係資料」の2件が、本年6月に光州（韓国）で開催された、第11回IACの審議を経て、ユネスコ事務局長の決定により、ユネスコ記憶遺産として登録されました。

今回登録された「御堂関白記」は、平安中期、政治家として栄華を極めた藤原道長（西暦966年～1027年）の自筆日記です（自筆本14巻、古写本12巻、公益財団法人陽明文庫所有）。今に伝わる平安貴族の日記で、自筆の原本としては最古のものであり、かつ当代の代表的貴族の筆跡を伝える最も確実な遺品としてその価値は極めて高く、1951（昭和26）年、国宝に指定されています。

日本ユネスコ国内委員会は、同史料が、現存する我が国最古の自筆日記であり、また、摂関時代最盛期の最高実力者であった人物の日記であること、貴族社会の中核にあった人物が政務や儀式、社会情勢等について記したもので、摂関政治の最重要事項のみならず日常生活の様子を記

録していること、及び翻訳され諸外国でも知られていることなどから、記憶遺産としてユネスコに推薦しました。

一方、「慶長遣欧使節関係資料」は仙台藩主伊達政宗が使節としてスペイン及びローマに派遣（西暦1613年～1620年）した支倉常長が持ち帰った遺品から構成されています。今回登録された遺品は、常長がローマで受けたローマ市民権証書（羊皮紙）、油彩の肖像画、及び当時のローマ教皇の肖像画です。これらは、キリスト教禁教時代を経て、今日まで伝来しており、他の関係資料とともに一括して、2001（平



国宝『御堂関白記』（自筆本姿）
公益財団法人陽明文庫提供

成13)年に国宝に指定されています(仙台市所有、仙台市博物館保管)。

本資料は、鎖国直前に我が国の使節が直接スペイン国王フェリペ3世やローマ教皇パウロ5世に謁見し、交渉を通じてもたらされたものであり、東西文化圏の交渉史上、貴重な資料であること、及び公文書である「ローマ市民権証書」など、大航海時代の外交史上、文化交渉史上、一級の遺産であることから、日本ユネスコ国内委員会からユネスコへの推薦を決定しました。

その後、「慶長遣欧使節関係資料」については、スペインにある関係資料と一体的に取り扱うことで価値が増すこと、本年が、慶長遣欧使節が石巻市月の浦港を出帆して400周年を迎え、日本及びスペインにとつ

て記念すべき年にあたること等から、スペイン側の関係資料94件を含め、スペインとの共同推薦を行いました。

文部科学省及び日本ユネスコ国内委員会としては、これらの貴重な資料を今日まで大切に守り伝えてこられた所有者及び関係者の努力に対して心から敬意を表するとともに、今回のユネスコ記憶遺産の登録を受け、これらの資料が今後も適切に管理・保存され、より多くの人がアクセスできるよう、世界の重要なドキュメント遺産の保護と振興という同事業の趣旨を遵守しながら、引き継がれていくことを期待しています。

第1号は「山本作兵衛炭鉱記録画・記録文書」



国宝『慶長遣欧使節関係資料』(支倉常長像)
仙台市博物館提供

ユネスコ記憶遺産の推薦について、ユネスコは、政府機関だけでなく地方自治体、NGOを含む団体、及び個人からの申請を認めています。我が国のユネスコ記憶遺産第1号として、2011(平成23)年に

登録された「山本作兵衛炭鉱記録画・記録文書」は、福岡県田川市及び福岡県立大学が直接ユネスコに推薦し、ユネスコ記憶遺産への登録が認められたものです。

同市では、ユネスコ記憶遺産に登録されて以降、同資料の保存・公開の活動を更に推進することを通じて、地域の活性化が進められています。例えば、同市の教育現場では、遺産が持つ美術的、文書的、及び歴史的特色について、教育面での活用を図る等、市民団体や大学等研究機関の多様なステークホルダーが連携し、ユネスコ記憶遺産を軸として、地域の歴史や文化を学ぶ教育の取り組みが始まっています。

「東寺百合文書」を推薦へ

ユネスコ記憶遺産は、2年ごとに審査・登録が行われます。次回(2014年3月締め切り、2015年審査/登録)の登録推薦に向けて、日本ユネスコ国内委員会ユネスコ記憶遺産選考委員会で議論を行い、今年5月10日に開催された第7回選考委員会において、日本ユネスコ国内委員会から推薦する物件は、国宝「東



国宝『東寺百合文書』(シ函と文書)
京都府立総合資料館提供

寺百合文書(とうじひやくごうもんじょ) (京都府所有、京都府立総合資料館保管) とすることを決定しました。

現在、2014(平成26)年3月末締め切りのユネスコへの推薦に向けて準備を進めています。

今後も、所有者はもとより地元の多様な関係者の長年の努力によって保護し、受け継がれてきた貴重なドキュメント遺産が、ユネスコ記憶遺産に登録されることを通じて、世界的に重要性を認められ、国際的に評価されていくことにつながっていくことを強く期待しています。

地域で育てる観光まちづくり人材 ～持続可能な観光まちづくりのための仕組みと人材育成～

小樽商科大学商学部社会情報学科 准教授 ● 大津 晶

地域活性化センターでは、地域再生の担い手となる人材の養成を目的としたワークショップ「地域再生実践塾」を実施している。本号では今年度第2回となる北海道小樽市での開催内容について、主任講師を務められた小樽商科大学の大津晶准教授にご報告いただいた。
(地域支援課)

はじめに

年間600万人以上の観光客が訪れている小樽市は、観光都市としての歴史は必ずしも長いものではなく、小樽運河論争が発端となった市民運動によって歴史的建造物をはじめとした地域資源が半ば偶発的に観光化したという経緯を持っている。この経験を生かし持続的な地域活性化の推進力に繋げるためには、次代の観光まちづくり人材を長期的な視点で育成することが重要である。地域の有形無形の資源を活用した種々の取り組みを事例として、持続可能な観光まちづくりの仕組みづくりとそれを担う人材育成の在り方を議論

することをねらいとして地域再生実践塾を開講した。

レクチャー(1日目)・・・観光まちづくりのための中間システム

はじめに私から、今回の実践塾全体を通じて用いる「観光まちづくり」の概念の定義を行い、地域資源と観光客を結びつけ観光アクティビティによるまちづくり促進と地域ブランド向上の好循環を実現するための中間システムの必要性、その仕組みを持続的なものとするための人材育成の重要性を解説した。

続いて小樽市観光振興室の中野室長から、小樽市の観光に関する概況の解説と行政の取り組み事例および

問題意識をご説明いただいた。観光客のうち札幌都市圏からの入り込みが約半数を占めていることによる滞在型観光の脆弱性などの課題を提示いただいた。

NPO法人小樽ソーシャルネットワーク理事の中山氏と小樽商科大学地域研究会の宮崎研究員からは、ICTの活用による観光まちづくり事例をご紹介いただいた。スマートフォン利用を前提とした地域通貨TARCAがねらいとする観光客と地元の店や市民、あるいは観光客同士のコミュニケーション促進の効果と今後のビジョンが示された。

小樽雪あかりの路実行委員会ボランティア部会長の簗谷氏からは、地域振興イベントにおけるボランティアの位置づけについて解説いただいた。ボランティア活動を通じて交換される「価値」や「満足感」を高める工夫とその取り組みの継続が海外からのボランティアツーリズムとして定着しつつあることなどが紹介された。

フィールドワーク(2日目)・・・祝津エリアと運河エリアの課題発見

実践塾2日目は市内の2つのエリアでフィールドワークを実施した。午前はおつて鯉漁で栄えた祝津地区を訪問し、NPO法人小樽祝津なげ会の渡部氏と青山氏に地区内に点在する番屋・倉庫群などを案内していただいた。

特徴的な自然環境と豊富な漁業資源、魅力的で差別化された観光施設、さらに鯉漁の歴史というストーリー性が加わった固有の地域資源を有しながら、地域ブランドの確立が充分できていない課題、そしてその課題解決を一時的な公的支援に依存せず、いかにして自律的に進めるかという点について活発な意見交換を行った。

午後は小樽運河エリアに移動し、旧日本郵船小樽支店から運河沿いに3名のおたる案内人ボランティアにご協力いただいて観光ガイドを体験した。

小樽観光大学の事業の一環として実施している「おたる案内人事業」の発足時から中心的に運営に携わってこられたNPO法人歴史文化研究所の美濃氏からは、単なるガイドではなく観光客のニーズを最も近くから汲み取り、観光事業者や観光行政にフィールドバックするコミュニケーションとしての役割の重要性の指摘があった。また昨年からの取り組んでいる市内の小学校6年生を対象としたジュニア案内人育成事業のねらいと成果についても解説があった。

ワークショップ(1・2日目)・・・ワックスボールの製作と地域通貨を用いた食べ歩き体験



ワックスボールづくりの様子



フィールドワークの様子（祝津）

は、昨年廃校になった小
プレゼンテーションで
れたように思う。
変充実した議論が展開さ
とから、短時間ながら大
遍的なものでもあったこ
の課題に直面している普
れぞれの活動地域で同様
まった参加者の多くがそ
であったが、各地から集
法の提案というやや抽象的なテーマ
定住人口減少・都市縮退時代の持
組みを考える」を課題としたグルー
プワークを行った。

今回の地域再生実践塾では、参加
していただいたみなさまに小樽での
取り組みのエッセンスを体感してい
ただくことを目的として、2つの
ワークショップを企画した。
初日のレクチャー終了後には「小
樽雪あかりの路」の装飾に用いられ
るワックスボールの製作体験を実施
した。実際の作業としては、鍋で溶
かしたワックスに水風船を数十回浸
し、適度に皮膜が厚くなったところ
で中の風船を割って冷ました後に着
色などの装飾を加えるという単純な
ものであるが、自分が作った世界に
ひとつのワックスボールにボラン
ティアが欠かさず火を灯し、訪れた
観光客が喜んで写真を撮ることで循
環する価値の一部を感じていただけ
たのではないか。

いた食べ歩きツアーの体験を実施し
た。TARCAが目指すコミュニ
ケーションツールとしての地域通貨
のポテンシャルの一面を体験してい
ただき、観光客には分かりづらいつ
言われることが多い夜の小樽の魅力
を楽しんでいただけたように思う。
こちらは希望者のみを対象とした
が予想を超える数の参加者があり、
運営側も過去最大規模かつ域外参加
の社会実験として有益な成果を得る
ことができた。

グループワーク（2・3日 目）…小樽における持続可能 な観光まちづくりの仕組み

2日目と3日目には「これからの
小樽の持続的な観光まちづくりの仕
組みを考える」を課題としたグルー
プワークを行った。

おわりに

学校を地域のコミュニティの拠点と
して再活用する案や、大学生が地域
と域外とを繋ぐ役割を担い、その活
動を地域と大学がバックアップする
仕組みなどの提案がなされた。また
個々の取り組みが連携していないと
いう課題に対し、行政がリードする
というよりもそれらの横の連携・協
調を支援する役割に徹するべきとい
う現実的な指摘もあった。

生のビジョンに繋がる気づきと共感
であったように思う。そのような意
味ではこの実践塾の成果が参加者各
自の現場において活用されることを
強く望むものである。

最後に本実践塾の開催に関わった
すべての方に御礼を申し上げる。特
にご多忙のなか話題提供を快諾いた
だいた特別講師のみなさまとワー
クショップやボランティアなどでお世
話になった方々には感謝したい。ま
た本実践塾が小樽商科大学大津ゼミ
3年生の頑張り無くしては成功しな
かったことも記しておきたい。ワー
クショップなどの企画や準備をサ
ポートし、ディスカッションにも積
極的に参加したゼミ学生の姿を頼も
しく感じた3日間であった。

平成25年度第2回 地域再生実践塾の概要

<日程>

第1日目 平成25年7月16日（火）

Lecture 1 「総論・問題提起」
主任講師：小樽商科大学商学部 准教授 大津 晶氏

Lecture 2 「小樽市の観光の現状と観光基本計画について」
特別講師：小樽市産業港湾部観光振興室
室長 中野 弘章氏

Lecture 3 「小樽の地域力を高めるまちづくりと情報化」
特別講師：NPO法人小樽ソーシャルネットワーク
理事 中山 仁史氏

Lecture 4 「市民のおもてなしによる地域ブランディング」
特別講師：小樽雪あかりの路実行委員会
ボランティア部会長 簗谷 和臣氏

Workshop 1 「ミニワックスボールの製作」

第2日目 7月17日（水）

Lecture 5 「フィールドワークの説明」

主任講師：大津 晶氏

Field Work 1 鯨漁のまち祝津のたから
特別講師：NPO法人おたる祝津たなげ会
事務局長 渡部 満氏

Field Work 2 おたる案内人はまちのコミュニケーター
特別講師：NPO法人歴史文化研究所
総務部長 美濃 進氏

Group Work 1 ーフィールドワークのまとめ

主任講師：大津 晶氏

Workshop 2 （※希望者のみの参加）
地域通貨「Tarca」を用いた店めぐり体験（兼夕食）
解説：小樽商科大学地域研究会
学術研究員 宮崎 義久氏

第3日目 7月18日（木）

Group Work 2 ーディスカッション・発表

主任講師：大津 晶氏

Lecture 6 総括
主任講師：大津 晶氏

都会の女性招き、婚活イベントを開催

～阿智村定住者誘引プロジェクト～



長野県阿智村協働活動推進課

● 大石真紀子

都市から地方への移住・交流は、人口減少社会における地域活性化策の柱として期待される。地域活性化センターでは、「移住・交流による地域活性化支援事業」として、地域団体もしくは市町村等が自主的に主体的に実施する、都市住民などを受け入れる事業を支援している。今回は平成24年度に同事業を活用した長野県阿智村の取り組みを同村協働活動推進課の大石真紀子氏にご紹介いただいた。

人口の維持が大きな課題

長野県下伊那郡阿智村は、長野県南西部に位置する人口6786人(2013年7月現在)の中山間地です。西は中央アルプスを境として岐阜県に接し、標高410mから2191mまでの山間地に60の集落が点在しています。村内で湧出している南信州最大の昼神温泉郷や360度の眺望が楽しめる富士見台高原は1年をとおして観光客で賑わっています。

一方で、阿智村ではこの10年間、年間約100人のペースで人口減少

が続いています。そこで2012年度、「移住・交流による地域活性化支援事業」を活用し、定住者確保を目的に二つの事業を実施しました。

一つは、移住者受け入れを目的とした定住ツアー、もう一つは、都市在住者と村内在住者との出会いイベントです。事業実施にあたり重視したのは、地域に住むことに誇りを感じ、主体的に生きていく人を増やそうという点です。

ここでは出会いイベント「それゆけ里ガール enjoy 婚活inあち」に焦点を絞ります。イベントは7月から12月にかけて全4回実施し

ました。4回とも1泊2日で、参加者は基本的に毎回参加してもらいます。女性参加者の募集にあたっては名古屋から高速バスで90分という本村の立地を考え、名古屋圏の新聞やタウン情報誌に広告を掲載しました。その結果、予想を上回る16人の女性から申し込みがありました。

パーティーだけでは限界が：

全国と同様、阿智村においても未婚率は上昇し続けています。そこで2009年度から結婚支援事業を住民団体に委託し、行政職員も住民団体への支援という立場で一緒に実施してきました。

最初に力を入れたのはパーティー事業です。しかし、短時間のパーティーでは相手に魅力を伝えられない人も多いことがわかりました。そこで2010年度からはさらに農業婚活をスタートさせました。共同作

業をとおして交流することを狙い、アットホームな雰囲気を作り、2年間企画・実施しました。

ところが2年目の終了後、参加者から「作業量が多く、交流ができない」との声が上がりました。スタッフは交流に多くの時間を割いたつもりでいたのですが、このギャップの理由を検討しました。その結果、作業内容や企画を全て主催者側で準備しているため、参加者は「やらされている」形になってしまい、それぞれの主体性が発揮できなかったのでは、との結論に達しました。

そこで本事業の実施にあたっては次の2点を決めました。1点目は農村地域での結婚支援に長く取り組んできた「地域結婚支援センター」代表の板本洋子氏のノウハウを取り入れる。2点目は地元参加者で実行委員会を組織し、企画を考える段階から関わりをつくることです。

プログラムづくりで工夫凝らす

板本氏からはたくさんの方のアドバイスをいただきました。特に印象に残ったのは次の5点です。①参加者同士が話す機会を大事にする②地域の資源を活用し、男性が自分の地域の魅力に気付く③2回目以降も来てもらえるように、次回につながる企画を取り入れる④参加者に任せると



農家での野菜収穫体験

ころとスタッフでやるところのメリハリをつける⑤企画全体のストーリーをつくったうえで、一つひとつの企画の位置づけを明確にし、ネーミングも工夫する。

アドバイスをふまえ、第2回では男女各2人のグループをつくり、一台の車で村内をめぐる企画を実施しました。さらに「夏」をテーマに写真を撮り、撮影した写真は夜の交流会の際にみんなの前で発表します。

この企画の狙いは、少人数のグループにすることで、車内でじっくり話す機会をつくることです。男性も車を運転するとなれば、「どこに行こう？」と考えざるを得ませんので主体性が発揮できます。地元で暮らす男性にとっては当たり前の光景を見て、女性は感動する、この姿を通して男性は自分の地域を見直すこ



南アルプスの見える畑でブルーベリー狩り

とができます。

ネーミングも「里コンカフェ」「それゆけ婚活会」など工夫しました。私達スタッフは企画構成のうえで、板本氏から大いに学ぶことができました。

男性も積極的に

男性参加者については村内に声をかけ、イベント実施の3カ月前から実行委員会を開催しました。10人近い男性が集まりましたが、これまで接点がない男性同士が多く、実行委員同士の関係をつくるのもすんなりとはいきませんでしたし、板本氏のアドバイスに従ってみんなで企画を考えるという難しさもありました。それでも回を重ねるにつれ、積極性も出てきました。

最終回のクリスマスパーティーの計



クリスマスパーティーの様子

画では3回の会議を実施し、自主的に役割分担をすることができました。

トークを通じて恋愛観をつくる

今回の企画で特徴的だったことは板本氏が実施したトークタイムにより、一人ひとりの恋愛観がつけられていったことです。第1回、2回とも、女性は夜遅くまでガールズトークをくりひろげていたそうです。感想として「恋愛観の枠がはずれた」という声に参加者から出してきました。

そこで3回目には、女性と板本氏のトークタイムをつくりました。女性の意見に応じて、板本氏が男性の視点や地域の特性などを話したそうです。その間、男性は男性だけでトークを行いました。第4回には参加者全員で自分の結婚観を話す時間を用意しました。参加者はこれらのトー

クを通じて、自分と向き合い、自分の恋愛観、結婚観をつくっていききました。

2組が結婚！ 今後課題も

ちよつとしたアクシデントもあって準備不足は否めず、必ずしも企画のときは良いとは言えませんでした。しかし終わってみれば参加者の中から2組のカップルが誕生し、この春、2組とも結婚しました。

結婚して阿智村で暮らし始めた女性には「企画の内容もさることながら、目の前の人と向き合えるか、出会えるかが大事だった」と話してくれました。この感想からは「目の前の異性と向き合うためにはどんな企画をすれば良いか？」という課題が見えてきます。しかし、参加者の姿勢にかかわることであり、答えは簡単に見えてきません。

また、もう一つの課題として相談者の必要性があげられます。恋をすれば心が傷つくこともあり、個別、専門的な支援が必要です。誰がどのような形でこの支援を担うことができるのか模索しています。

2013年度もこの事業で得たものを活かし、秋冬に同様の企画を実施する予定です。昨年の学びを活かして、楽しく取り組みたいと考えています。

海水浴客の安全確保に貢献

～人材育成やボランティア活動も～

風光明媚な海のまち

柏崎市は、新潟県のほぼ中央に位置し、地域の南西から東部一帯にかけて三階節で名高い米山をはじめ、黒姫山、八石山、西山連峰といった山々が連なり、北西方向は延長約42^{キロ}におよぶ海岸線で日本海に面し、佐渡島を望む風光明媚な地方都市である。

古くから北国街道の宿場町、北前船の寄港地などとして栄え、豊かな

経済と独自の文化を誇ってきたが、明治時代に周辺地帯から石油が噴出したことにより、製油会社の設立が

相次ぎ、それに関連して機械金属工業の発展も見られた。また、海岸線には15カ所の海水浴場があり、海水浴シーズンには県内外から100万人前後の海水浴客が訪れるなど、海のまち「柏崎」としても賑わいをみせている。

今回は柏崎市の海水浴場やプールで安全指導、監視、救助といったライフセービング活動を行うとともに、ライフセービングを通じた青少年の健全な育成を図っている「柏崎ライフセービングクラブ」の活動について、会長の上森一利（うえもり かずとし）氏、理事の池谷薫（いけ たに・かおる）氏のお話を交えながらご紹介する。

安心・安全な海のために

毎年多くの海水浴客が訪れる夏の柏崎市では、平成3年に新潟県内最多の死亡事故が起きるなど、海水浴場の事故防止・安全管理が大きな課題となっている。

現在「柏崎ライフセービングクラブ」で理事を務める池谷氏は平成4年、大学進学にともない柏崎市に移り住んだ。もともと水泳が好きで、海での監視活動にあこがれていたこともあり、柏崎市の海水浴場でライフセービングのトレーニングを受ける一方、大学2年の時に仲間の学生とともに大学内にライフセービングクラブを立ち上げ、柏崎市におけるライフセービング活動に従事した。

こうした池谷氏をはじめライフセービングクラブに所属する大学生の活動が柏崎市の海水浴場の安全に貢献していると評判になり、海岸沿

いの地域住民から要望を受ける形で、平成8年7月、安全な海水浴場を維持することを目的に「柏崎ライフセービングクラブ」が設立された。同クラブの設立にあたっては柏崎市や柏崎観光協会、商工会議所といった団体の職員や、地元柏崎市に本部を置く新潟産業大学の学生など合わせて約60名がメンバーとして参加した。

人材育成、災害時にボランティア活動も

「柏崎ライフセービングクラブ」の活動は夏の海水浴シーズンにおける海水浴場の安全管理だけではなく、メンバーは年間を通して個々に体づくりやトレーニングを行い、夏の海水浴シーズン本番を迎える前にはクラブ全体でライフセービング技術の確認を行う。また、監視をいかに正確に、有事の際にはいかに素早く救助できるかというスポーツとしてのライフセービングも年間を通して行われている。

会長である上森氏が「一番力を入れて取り組んでいる」と語るのは、ライフセーバーの育成や海を通じた青少年の育成といった人材育成活動である。ライフセーバーの育成事業として、救助資格を取得するための各種講習会や検定会を行い、これま

★ 団体プロフィール ★

設立年＝平成8年7月
設立・運営主体＝自主的組織
代表者＝会長 上森 一利
構成員＝107人
〈連絡先〉
〒945-0067
新潟県柏崎市西港町12-11
柏崎マリンスポーツ連絡協議会内
柏崎ライフセービングクラブ
電話：090-1219-4533
柏崎ライフセービングクラブHP：
<http://kashiwazaki-lsc.com/>



海水浴場の監視活動の様子。多くの海水浴客でにぎわう中、細心の注意を払う

でに多数の有資格者を育成してきた。

また池谷氏はライフセーバー専門の会社「ライフケアー柏崎」を立ち上げ、「柏崎ライフセービングクラブ」で育成されたライフセーバーをプロとして雇用するなどライフセーバーの育成に取り組んでいる。

「柏崎ライフセービングクラブ」では平成21年から小・中学生を対象に、海で楽しむための安全対策・知識について学ぶことを目指す教室を



子ども達には海で楽しむための安全対策・知識を教えている

毎月開催している。さらに、ライフセービング自体がまだまだマイナーな存在であることから、柏崎の海を訪れた人に少しでもライフセービングについて知ってもらうため、ライフセービングの全国大会を柏崎市に誘致するなど、PR活動にも力を入れている。

このほか、地域の小中学校の課外授業にも積極的に協力し、ライフセービングを教える「出前授業」も手掛けている。この「出前授業」では小・中学生に海の楽しさや怖さ、命の尊さを教えており、受講した小・中学生だけでなく、保護者や教職員にも好評なため、他の学校から問い合わせも来るが、本来の監視活動の準備があり、なかなか日程がとれない

い状態だという。

一方、同クラブでは平成16年に発生した中越地震や平成19年の中越沖地震などの災害時には、被害が多い地域に水運び、一カ月間、毎日炊き出しを行うなどボランティア活動も積極的に行った。こうした災害時における継続的な活動が被災者支援や地域の復興に大きく貢献したと評価され、平成19年には日本ライフセービング協会から表彰を受けるという大きな成果も上げている。

こうしたクラブの多方面にわたる活動は「ライフセーバーが常駐している安全・安心で快適な海水浴場」として地域の知名度向上にも貢献しており、柏崎を訪れる海水浴客の増加にも寄与していると言える。



柏崎ライフセービングクラブのメンバー

目標は柏崎市民総ライフセーバー

現在、100名を超える会員が所属する「柏崎ライフセービングクラブ」だが、メンバーの多くが地元で大学に通う大学生であり、大学生の力に頼る部分が多いのが実情だ。

そこで同クラブでは大きな目標として、「柏崎市民総ライフセーバー」を掲げている。これは市民が海の楽しさ・怖さ、そしてライフセービングの精神を知ること、資格の有無にかかわらず、困っている人の助けができる市民が増え、地域外からくる海水浴客へのおもてなしにつなげていくというものである。

池谷氏は「日本では『海は怖いから近づくな』というような風潮もある。しかし、海外の海に囲まれた地域では、海を憩いの場として大人から子どもまでが楽しく過ごしている光景が見られる」としたうえで、「柏崎市の海にもたくさんの人に来てもらいたい」と語る。

安心して海水浴が出来るまち柏崎。その裏には「柏崎ライフセービングクラブ」のメンバーの力が大きく働いている。

編集委員

● 柳澤雅裕

「クレームに学ぶ クレームゼロ運動」を推進

信頼される日本一の市役所を目指して



須坂市総務部総務課
行政改革推進係長

● 寺沢隆宏

これまでの経緯と目的

須坂市では平成17年10月に制定した「須坂市役所の理念」に掲げる、「信頼され活気ある日本一の市役所づくり」を実現するための行動目標について、各職場から提出された案をもとに各部署の課長級職員による会議で検討を重ねました。

その結果、「クレームに学ぶ クレームゼロ運動」を行動目標とすることを決定し、こうした運動の推進機関として、平成20年度に新たに「日本一の市役所づくり推進委員会」を設置しました。

同委員会は総務部長が委員長となり、各部署から推薦を受けた課長級職員で構成しています。その主な任務は、①職場の現状分析②目標を検討し、部長会議に提案③各職場に対する目標の浸透④目標達成の取り組みに対する助言の4点で、委員会は2カ月に1回開催し、各職場から提出されたクレーム報告の検証など

を行っています。

クレームゼロ運動の内容

「クレームゼロ」といっても、単にクレームを無くそうという取り組みではありません。クレームはしっかりいただき、記録・分析したうえできちんと対応していこうというものです。

運動の成果として、クレームが減っていくという考えですが、未然に防げるクレームには積極的に対処していきます。このクレームゼロに向けた全職員共通の具体的な行動は次のとおりです。

- ① あいさつの励行
- ② すばやい声かけ
- ③ 第一に現場の確認
- ④ 期限の厳守

また、クレームに対する統一的な取り扱いについて検討した結果、対応手順を策定しました。この手順に基づき対応したクレーム内容を「日本一の市役所づくり推進委員会」に

おいて検証した上で、クレーム発生から検証までの経過を全職員に素早く周知し、日本一の市役所づくりに役立てています。

クレームを業務改善のきっかけに

以前はクレームに対する統一的な基準がなく、個人ごとに対応していましたが、対応手順を定めたことで突然のクレームにも冷静に対処できるようにになりました。また、クレームをただ単に苦情と受け止め、「何で私が言われなければならないのか?」「苦情を言われてしまった。運が悪かったな…」などと消極的な態度に陥ることなく、クレームを積極的に業務の改善につなげるきっかけとすることができました。

また、クレーム報告部署（総務課）

を明確にし、クレーム内容を様式にしたがい速やかに報告することで、クレーム情報の集約と共有が可能となりました。

今後の課題

そうは言っても、やはり突然怒られて苦情を言われると、「クレームに学ぶ」という気持ちにはなれず、気持ちも沈み、早く忘れてしまいたいということは正直あると思います。

クレーム報告の様式

クレーム報告・記録用紙	
年 月 日	
総務課長 へ	
報告者 (所属) 長の名前:	
次のとおりクレーム報告をします。	
クレームの日時	
クレームの内容 (概要を簡潔に)	
発生までの経過と背景 (できるだけ詳細に、そのときの心理描写も含めて)	
考えられる原因 (箇条書きで)	
対策 (箇条書きで)	
備考 (「対策後の反応」「後日談」「その後の改善内容」等を後日記入)	

だからこそ、そのような経験は、個人でも職場でも市役所全体でも2度としないよう、この経験を生かし、「クレームに学ぶ」必要があると思います。

今後はクレームの再発防止に向けて、さらに実効性を高めていくのが課題です。クレーム事例も多く蓄積されてきました。これを内容ごとに分類し、いつでも見られるクレーム対応のデータベースを整備し活用すること、さらにクレームゼロに向けて効果的に取り組むことも可能ではないかと思っています。

クレームを前向きに捉えて検証・共有することで、業務改善のアイデアに生かし、市民サービスのレベル向上に役立てていきたいと考えています。



大分県佐伯市長 ● 西嶋泰義

市民とともに歩むまちづくり

佐伯市は、大分県の南東部に位置し、宮崎県との県境にある人口7万8千人の市です。平成17年3月3日に、1市5町3村が合併し、903平方キロメートルと九州で一番大きな面積をもつ市となりました。市の西側には「祖母傾国定公園」の一角をなす山々が連なり、東には、「日豊海岸国定公園」にも指定されている270キロメートルにも及ぶ美しいリアス式海岸線が続きます。更に、広い市域には、九州屈指の清流を誇る1級河川「番匠川」をはじめ大小の河川が流れ、海、山、川と豊かな自然に恵まれた町です。そして、その豊かな自然から育まれる大分県の漁獲高の約半分を占める水産物をはじめ、豊富な食材を背景に、佐伯市は「食のまち」でもあります。地元のネタにこだわった佐伯寿司は世界一うまい自慢の寿司です。焼いた白身魚の身をほぐし、ごまと醤油やみりんを加えた「ごまだし」でつくる「ごまだしうどん」は、全国のB級グルメを集めた「B1グランプリ」で入賞し、一躍有名になりました。季節の魚介類をふんだんに使った「海鮮丼」をはじめ、猪肉や鹿肉を使った料理など、海山の幸が一年中楽しめます。ぜひ、一度佐伯にお越しいただき、豊かな食と自然を堪能していただきたいと思っています。

私は、まちづくりとは、まちが持つ計り知れない潜在力を引き出し、その価値を高めながら、まちの活力を創造することだと考えています。そして、その原動力となるのは、まちの主役である住民の力だと思っています。

佐伯の食をご紹介しましたが、今、佐伯の食に携わる民間の方たちの観光への意気込みや行動力を心強く感じています。B1グランプリの取り組み、塩糍の全国発信、食を対象とした各種の品評会での受賞など、食のまちにふさわしい活躍が続き、佐伯の食を全国へと確実に広げています。

また、南海トラフを震源とする巨大地震の発生が危惧

される中、本市では地域住民協働の取り組みにより、自治会の自主防災組織結成率84・7%、防災士養成人数470名、市内701カ所の津波避難路の整備、そして、全市を対象とした避難訓練の実施など、災害への備えが着々と図られています。

65歳以上の高齢化率が30%を超える本市では、高齢者福祉も大きな課題です。市内には22カ所に「さいきの茶の間」が開設されています。これは、住み慣れた地域の中に高齢者の皆さんが気軽に集い楽しめる場づくりを行うもので、200人を超す地域の方たちが手づくりで運営を行い、高齢者の皆さんを支えています。

また、子どもたちの見守りについても、学校や家庭だけでなく、地域で子どもたちを育てようと、住民の方々による学習支援や登下校時のパトロール、教育環境整備など様々な支援を行っているほか、放課後児童クラブの運営にも携わっています。

このように、観光や防災、福祉をはじめ多方面で市民の力の重みを強く感じているところですが、こうした住民の力、地域の力を引き出すためにはコミュニケーションが重要な鍵となります。

行政と住民とのコミュニケーションはもとより、住民同士や地域内のコミュニケーションがより活発になれば、様々な活動に広がり生まれ、地域活性化や自助、共助の取り組みも更に充実していくことが期待できます。

このことを十分に認識し、行政としてどのように取り組んでいくのか、また、職員一人ひとりが一住民としてどう関わっていくのか、しっかりと検討したいと思っています。

これからも、地域力、住民力、そして行政力が一体となったまちづくりに努め、だれもが「この町に暮らしてよかった」と胸を張って言えるような魅力ある佐伯市を創造してまいります。



出雲大社 平成の大遷宮

国宝御本殿

60年ぶりの蘇り

平成20年4月20日の仮殿遷座祭から約5年の歳月をかけた国宝御本殿の修造が終わり、平成25年5月10日に「本殿遷座祭」が執り行われました。出雲大社平成の大遷宮は、今後も摂末社などの御修造、奉祝事業や記念事業など平成28年まで行われます。

新しく生まれ変わった御本殿にまみえることのできるこの貴重な機会に、ぜひ島根へお越しください。

 出雲大社「平成の大遷宮」奉祝行事ガイド <http://izumoooyashiro-daisengu.jp/> 

地元発オブショナルツアー情報（しまね観光ナビ） <http://www.kankou-shimane.com/ja/tour> 


神々の国しまね
神々の国しまね実行委員会

那須塩原市は、首都圏から150キロメートルの栃木県の北部に位置し、温泉、自然、食に恵まれた街です。

那須塩原市の自慢として温泉があげられますが、代表的な温泉地は2つあります。このうち塩原温泉は、1200年以上の歴史を持つ温泉郷で、箒川の渓谷に沿って11の温泉地が連なっています。1つの地域に実に多彩な泉質や成分の温泉がある点で、全国的にみてもまれな地域でもあります。新しい塩原温泉のB級グルメとして『とて焼』が人気になっています。もう1つの温泉地は、国民保養温泉地に指定されている板室温泉です。素朴な湯治場として療養や保養を中心にご利用いただいています。

また、日光国立公園を擁する豊かな自然が残っており、四季の移り変わりとともに表情を変える山々や渓谷の美しさが自慢です。こうした豊かな自然に育まれた、農畜産物もとても美味しい地域でもあります。産出額が全国第4位（本州以南では第1位）の生乳をはじめ、那須塩原ブランドになっている高原ほうれんそうや味恋とまとなど様々な食材の宝庫です。

温泉と自然と食に恵まれた那須塩原で、心と身体を癒しませんか。お越しをお待ちしています。



■様々な植物が自生している「沼ッ原湿原」。木道が整備されており、気軽に自然散策が楽しめる



■那須塩原市の牛乳消費拡大PRキャラクターの「みるひい」



■とて焼。生地是那須塩原市産の牛乳と卵を使い、中の具材は各販売店のオリジナル。「デザート系」から麺や肉などが入った「おかず系」のものなど様々な種類がある



■那須塩原ブランドに認定されている「高原ほうれんそう」と「味恋とまと」。ほかにも牛乳や物産等も那須塩原ブランドに認定されている



■目の覚めるような紅と澄んだ空の青さが織りなす紅葉。山々はもちろん、川岸でも色とりどりの美しい紅葉が楽しめる



■塩原温泉は、塩化物泉や硫黄泉など多彩な泉質を有する1200年以上の歴史を持つ温泉郷



■板室温泉は、下野の薬湯として知られ、深い山間にたたずむ自然あふれる静かな温泉地

平成25年度地域再生実践塾開催のお知らせ

地域再生の方法について、さまざまな視点から考えるワークショップ「地域再生実践塾」を開催します。このうち第5回と第6回の開催内容は以下の通りで、現在、参加者を募集しています。

- 対象 地方公共団体、商工会、商工会議所、NPOなど、地域再生に取り組んでいる方
- 募集人員 いずれも40名
- 参加費用 無料（開催地までの往復交通費、宿泊費、飲食代などは参加者負担）
- 申込方法 申込書を当センターまで送付してください。＊詳しくは、当センターのホームページをご覧ください。

通信センター

地域再生実践塾 第5回 大分県別府市

『多様な地域資源を組み合わせたまちづくり』

平成25年10月23日（水）～10月25日（金）会場：別府市役所 5階大会議室

開催趣旨

全国各地で地域資源を活用した独自の地域再生の試みが行われる中、大分県別府市では、コミュニティ・ベースの事業活動を基礎に地域資源の発掘、地域間ネットワークの構築による体験型イベント「オンパク（別府八湯温泉泊覧会）」やその温泉地特有の文化的景観を活かしたまちづくりを行い、地域の再活性化に取り組んでいます。また、平成12年に設置された立命館アジア太平洋大学（APU）は学生や教員の約半数が外国人であり、多くの外国人が暮らすまちとして賑わいをみせています。さらに近年では、こうした地域資源に創造性のある現代アートを取り入れることで、新たな魅力の創出を図る取り組みも行っています。

そこで、別府市の先進的な取り組みに学びながら、地域資源の活用によるまちづくりを考えていきます。

主任講師



立命館アジア太平洋大学大学院
アジア太平洋研究科
教授 三好 皓一 氏

1947年生まれ。早稲田大学政治経済学部卒。三井銀行、国際協力事業団（JICA）を経て、2003年より立命館アジア太平洋大学大学院教授。その間、アジア開発銀行カントリー・オフィサー、ブルネイ企画庁アドバイザー、ハーバード大学研究員等に就任。大阪大学人間科学博士（2005）。専門分野は、コミュニティ・キャパシティと地方開発、評価論・計画論、国際協力政策。現在、国際協力機構「コミュニティ・コミュニティと地方開発研修」コースリーダー（年8件程度）。日本評価学会副会長、国際開発学会理事、トヨタ財団アジア隣人プログラム選考委員会委員長、インスティテュート・フォー・コミュニティ・デザイン代表理事等。編著書に『Community Capacity and Rural Development: Reading Material for JICA Training Programs』、『地域力：地方開発をデザインする』、『評価論を学ぶ人のために』等。

開催日程

- ・第1日目 10月23日（水）
 - 13：30～ 開講式・オリエンテーション
 - 13：45～ Lecture1 総論・問題提起
 - 14：55～ Lecture2 地域づくりのための行政の取り組み
 - 15：35～ Lecture3 オンパク（別府八湯温泉泊覧会）について
 - 16：45～ Lecture4 アートを活かした別府のまちづくりについて
- ・第2日目 10月24日（木）
 - 8：20～ 出発
 - 9：00～ Field Work1 分散・体験型見本市を使ったワークショップの活用
 - 10：40～ Lecture5 APUと別府市の関わりについて
 - 11：40～ 昼食（立命館アジア太平洋大学カフェテリア）
 - Field Work2 立命館アジア太平洋大学
 - 13：40～ Field Work3 鉄輪温泉街まち歩き
 - 15：30～ Field Work4 北浜エリアまち歩き
 - 17：00～ Group Work1 視察・体験結果のとりまとめ
- ・第3日目 10月25日（金）
 - 9：00～ Group Work2 グループ発表・講評
 - 11：00～ Lecture6 総括
 - 11：55～ 閉講式

地域再生実践塾 第6回 東京都品川区

『地域ブランドと商店街の活性化』

平成25年11月21日（木）～11月22日（金）会場：荏原第三地域センター（品川区平塚1丁目13-18）

開催趣旨

近年、郊外への大型店の進出や通信販売の普及など地域の商店街をとりまく現状が厳しくなる中、全国各地で商店街活性化のための様々な取り組みが行われています。

中でも、関東有数の長さを誇る東京都品川区の戸越銀座商店街では、商店街を「地域のアイデンティティが集約された“ふるさと”の一端を担う重要な場所」ととらえ、地域の大学と連携して、全国で初めての商店街ブランドである「戸越銀座ブランド」による商品の開発などを、数々のヒット商品を生み出しています。また、電線類の地中化による街路の整備や、ITを活用して新しい形での商店街の情報サービスを発信する「ユビキタス商店街プロジェクト」をスタートさせ、便利で安心・安全な商店街の実現に向けて活動しています。

そこで、品川区戸越銀座における商店街活性化策について、具体的事例を検証しながら、今後の商店街活性化の展望について検討します。

主任講師



株式会社ユーデザイン 代表
古市 修 氏

1971年生まれ東京都出身。明治大学大学院理工学研究科建築学専攻博士後期課程を経て博士号（工学）を取得。明治大学理工学部の助手を経て、同大学の起業支援プログラムにより、大学研究機関の理論や技術を実際のまちづくりに活かすための会社である株式会社ユーデザインを2007年に設立。日本各地において景観デザインや街並み整備と共に、商店街プロモーション活動などを含めた総合的なまちづくりを実践してきた。現在、戸越銀座商店街に拠点を置き、品川区の幾つかの商店街における地域ブランドづくりに力を入れて活動している。明治大学まちづくり研究所の客員研究員。

開催日程

- ・第1日目 11月21日（木）
 - 13：00～ 開講式・オリエンテーション
 - 13：20～ Lecture1 総論・問題提起
 - 14：15～ Lecture2 商店街の活性化のための支援策
 - 15：05～ Field Work 戸越銀座商店街のまち歩き
- ・第2日目 11月22日（金）
 - 9：00～ Lecture3 ニーズに応えるまちづくり
 - 10：40～ Lecture4 コロケを使った地域ブランド化
 - 11：40～ Group Work1 視察の整理・意見交換
 - 14：00～ Group Work2 グループ発表・講評
 - 15：00～ Lecture5 総括
 - 15：50～ 閉講式

★日本橋プラザビルイベントスペース

9月

- 9月5日(木)～6日(金)
坂井市(福井県)
『「越前 まるごと坂井市 魅力の再発見」～
海・里・山のもたらす豊穡の恵み～』
- 9月9日(月)～10日(火)
徳島県
『おいでよ徳島キャンペーン』
- 9月11日(水)～12日(木)
島根県市町村総合事務組合(島根県)
『神々の国・島根県内の8市がお届けする、とっ
ておきの特産品フェア』
- 9月17日(火)～18日(水)
上伊那北部観光連絡協議会(長野県)
『信州伊那谷 上伊那北部物産展』
- 9月19日(木)～20日(金)
七尾特産品協会(石川県)
『能登七尾! ちょっと寄ってかんかいね。～七
尾の食と心のおもてなし～』
- 9月24日(火)～25日(水)
三島町(福島県)
『来てみらんしょ! 見てみらんしょ! 編み組み
工芸の里・奥会津三島町へ』



(写真)

- 1 7月1日(月) 山形県東根市
- 2 7月16日(火)～17日(水) 日本三景観光
連絡協議会(宮城県・京都府・広島県)
- 3 7月18日(木)～19日(金) 中国五県物産
観光協議会(中国地方)
- 4 7月23日(火)～24日(水) 榎原・高市広
域行政事務組合(奈良県)
- 5 7月25日(木)～26日(金) 山梨県

【編集後記】

▼ギネス世界記録に挑戦する各地の動きがマス
メディアなどで取り上げられる例がこのところ
目立っています。地域住民の一体感醸成に役立
つほか、知名度が向上し、観光誘客や地域活性
化にもつながるという大きな効果があるよう
です。今月号の特集ではこうしたギネス世界記録
をめぐる各地の奮闘ぶりを紹介していただきま
した。

▼14の事例を拝見しますと、それぞれバラエ
ティーに富み、地域の活性化に取り組む関係者
の意気込みが伝わってきます。特に青森県弘前
市の横笛の合同演奏や新潟県燕三条地域のステ
ンレスカップと地元産の農作物のミックス
ジュースによる「乾杯リレー」、さらには石川
県輪島市の棚田を舞台にしたLED電球による
見事なイルミネーションなどは、いずれも当該
地域ならではの「資源」に着目し、それを上手
に利用して世界記録を達成しており、そのアイ
デアには感心させられます。

▼今後もギネス記録への挑戦は地域おこしの一
つのツールとして活用されていくと思います
が、一過性のイベントに終わらせることなく、
記録樹立を契機に継続的な活動にしていけるこ
とが求められそうです。

▼最近注目されつつある「世界記憶遺産」につ
いて文部科学省に解説記事をご執筆いただきま
した。ご参考になったでしょうか。(堀)

【10月号予告】
特集Ⅱ「起業支援で地域経済を活性化」(仮)

地域づくり9月号

2013年9月1日発行 編集・発行＝一般財団法人地域活性化センター

東京都中央区日本橋2-3-4 日本橋プラザビル13階 電話03-5202-6131(代) <http://www.chiiki-dukuri-hyakka.or.jp/> 印刷・製本／株式会社丸井工文社

法律で許可された場合以外に、本誌からの無断転載を禁止します

落丁・乱丁はお取り替えます。地域づくり情報課(03-5202-6138)まで、ご連絡下さい。



豊かな街づくりに 役立つ宝くじ。

宝くじの収益金は、図書館や
動物園、学校や公園の整備を
はじめ、少子高齢化対策や
災害に強い街づくりまで、
いろいろなかたちで、みなさまの
暮らしに役立てられています。



財団法人 **日本宝くじ協会**

財団法人 日本宝くじ協会は、宝くじに関する調査研究や公益法人等が行う社会に貢献する
事業への助成を行っています。 **日本宝くじ協会ホームページ** <http://jla-takarakuji.or.jp/>

